
その男、孤独の戦士なり

アザトク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その男、孤独の戦士なり

【Nコード】

N7075Q

【作者名】

アザトク

【あらすじ】

テンプレ通りに死に、神からの力を貰って…まあよくあるお話

銃撃0（前書き）

他の作品が…orz

銃撃0

「言い訳を聞こうか」

上下左右前後、見渡す限り白い部屋で俺は少女を正座させていた。

「いや、本当に面目ない」

理由は簡単だ。

なんでもこの少女は神様らしくて仕事サボってたら俺が死んじゃったらしい。

なんともテンプレなことか・・・

「まあいい、どうせ転生パターンだろ？ それ以外は認めない」

「強制っ!？ いや、そのとおりですから良いんですけど」

曰くチート能力をくれるらしい。

「じゃあ、あれだな。二つ能力がほしい」

「なんですか？」

「一つは銃の扱いをうまくすること。種類は関係ない、銃の全般の扱いでだ」

「もう一つは？」

「あれだ、なんか適当にそっちでくじ引きでもして決めてくれ」

「そんなんでいいんですか？」

驚いた：拍子抜けしたような顔の幼女

「気にするな、銃の能力に関しては絶対だぞ」

「はい、では世界の方は――――」

「知らん、勝手に決めろ。でも、出来ればスリリングな世界…漫画の世界とかが希望だ」

「は、はい、じゃあ行ってきましたください」

「精々、好きにやってくるよ」

こうして俺の物語は始まった。

銃撃0（後書き）

ここまでできたら勢いだ！！

銃撃1（前書き）

頑張ります

銃撃1

神からこの世界に送られて一年が経った

どうやらこの世界は『魔法先生ネギま!』の世界らしい。

おっと自己紹介が遅れたな、あえて本名は言わないがこの世界じゃ弾と名乗っている。

そんな俺は今、スコープで敵空中艦を見ていたりする。

「へえ、両軍合わせて十五艦か」

俺は三年ほど前からどこにも所属せず、純粹に戦争を妨害している。

時には前線に出たり、時にはこうして隠れて遠距離から撃ち落としたり。

神様もナイスな贈り物をくれたぜ。

俺が貰った能力は二つ

一つは銃全般を扱える能力

もう一つは『銃痕眼』

この眼は結界や壁のようなもののどこに銃弾を撃ち込めば効果的かを教えてくれる眼

そこを撃てば被害甚大。対人戦においてもほとんど戦闘不能、よければ即死

そういう点を“痕”と呼んでいる

まあ人体は眼を使う必要もないけど。

とにかく俺は連合と帝国から嫌われてる存在

いまさらどちらかの味方にはなれんだろうな。

顔も割れてるし

やっぱりあれだね、後ろに隠れてコソコソ撃つのが一番安全なんだね。

今回は依頼で連合国の空中艦を全滅してほしいらしい。

簡単だと思ったんだけどね。

スコープの先には紅い翼の面々

あのチビッ子が何十層もの障壁張ってるから最低でも三発は撃たなきゃいけないんだよ。

絶対一発撃ったら場所気づかれるでしょ。

しかたがない、前に出ますか。

でもとりあえず、一番薄いところは一発で撃沈できそうなので撃つ

ておく。

紅い翼との初のご対面だ、祝砲にしてはまあまあかな。

ナギside

「来やがったな！」

突然、艦隊が火の手をあげて撃沈した。

どうやら噂の銃の野郎がきたみたいだ。

「ナギ、もうそこに来てます！ よそ見しないでください！！！」

アルの声に反応して振り向くと隣の艦に一人の男が降り立ってハンドガンを両手に構え発砲するとすぐさま撃沈した。

なにしやがったんだ！？

大威力の魔法を放ったわけでもねえのに普通の弾丸でなんで空中艦が撃沈すんだよ！！

「くっ、千の雷！！」

「舐めるな！！」

千の雷を放ったが一発の銃弾で防がれた。

「…まじかよ」

驚いたのは俺だけではない、紅き翼の皆は当然、この戦場にいるすべての人間は驚愕を隠しきれなかった。

「ふむ、良い雷だ。もっと精進しておけ」

気づいたら俺の懷までやってきて俺の腹に蹴りを入れてきた。

「かはっ!!」

冗談じゃねえ、強すぎる・・・だ・・・ろ。

俺は意識をそこで落とした。

side out

あれ以来、俺は『厄災の弾丸』と呼ばれている。

理由は俺がでてきた戦場は碌なことには決してならないからだ。

そんな俺は追われている。

「まちやがれ手前え!」

森の中を木の枝を渡りながら全速力で走る。

後ろでは雷やら炎やら斬撃やら重力魔法やらが飛び交っている。

こうなったのは一時間前、俺がこの森を歩いていたら紅き翼の面々

が現れて俺に攻撃し始めたのだ。

あゝやだやだ。

俺はしばらく放浪の旅でもしていたいの。

アルビレオの重力魔法がうざい、イレギュラーな動きをしながらじやなきやすぐに捕まる。

詠春もうざい。

俺が撃っても斬られちゃうし。

本気で戦おうか？ いや、面倒くさい。

ここで全員殺すと原作どころか世界が壊れちゃう。

ライフメーカーさんとは一騎打ちしたいがそれまでが面倒くさい。

うん？ 連合と帝国はおろかいろんな奴らがくる場所に俺一人で乗り込めるか？

いけるかな？ そう信じている。

「逃がすか。ラカンインパクト!!」

「ちっ、既に筋肉達磨が仲間になってたか」

チートキャラがいるとは面倒くさい、本格的に面倒くさい。

筋肉達磨のせいで追いつかれちゃったし、なんなのこいつ。

「ふふふ、ようやく止まってくれましたね」

「粘り過ぎじゃ貴様」

「・・・・・・・・・・」

「くくく、いつもの雪辱を晴らしてやるぜ」

「こいつが噂の…」

「いくぞお前ら！」

上から順にアルビレオ、ゼクト、詠春、ラカン、ガトウ、ナギ

はあ、なんでこうなった。

殺らなきゃ殺られるので応戦する。

ハンドガンを装備して乱射

「どこに撃っているのです、っ!？」

一見外れているように見える弾丸は木や他の弾丸に当たって反射をして瞬く間にクモの巣ならぬ弾丸の巣が出来た。

弾丸が飛び交う中で俺は駆ける

やっかいなのはラカンとゼクト

アルビレオも中々だが優先すべきはこの二人だろう。

ラカンに肉薄して俺は銃口を向ける。

「へ、俺には銃なんて効きやしねえよ」

「それはどうかな？」

ニヤリと笑って発砲する。

狙うは脇腹と肩

どちらも掠らせるように撃ってすぐさま離れる。

右腕で殴ろうと拳を突き出すラカンだが若干動きが鈍り直後、弾丸の巢にからめ捕られた。

「ぐわあああああ！」

身体中にできる銃痕

普通ならば絶対に通ることはないだろうただの弾丸がラカンの体に減り込む。

「馬鹿が、この銃弾の巢のなかで無暗に動こうとするからだ」

次に狙ったのはゼクト

こいつが持つて多彩な術は厄介すぎる。

「魔法の射手571――――」

「させんよ！」

放つ前に腹へ思い切り蹴りを入れて木に叩きつけて気絶させる。

一般人にそんな危険な技を使うなよ。

苦笑いすると俺の体が急激に重くなり、倒れ掛かったところに一撃が飛んできた。

なんとか転がって避けたがなんて危ないんだ。

犯人はアルビレオとガトウ

重力魔法と居合拳のコンボはやばいわ。

ギリギリで避けたから良いもののあれは即死級の技だぞ。

「ちっ、化け物だなお前さん」

「そんなこと言うな、お前も化け物達の仲間だろうがガトウ」

「抜かせっ！」

豪殺居合拳の連打、なんとか逃げ続けてるがヤバいな。

「今だ！ 千の雷！！」

どうやら誘われたようだな、真ん前に現れたナギに千の雷を放たれる。

銃で痕を撃つが途中で斬撃が飛んできて弾丸が切られてしまう。

「ちい！ 詠春か！！」

広範囲に及ぶこの呪文、まともなことでは逃げられない。

そして俺は雷に飲み込まれた。

詠春 side

「どうやら喰らったみたいだな」

俺達は合流してゼクトとラカンの手当てをしていた。

「まったく、化け物だったぜあいつ」

「まったくじゃ、二度と闘いたくないの」

ゼクトはアバラが三本程折れている、ラカンに至っては銃弾が減り込んでおり、所々では貫通もしている。

「俺様の気の防御速度があと零コマ数秒遅かったら死んでたね」

その顔は戦士のそれ、本当に危なかったのだろう。

「しかし彼の銃、魔銃や特殊な武器ではなかったようでしたが…」

「ああ、ありやどうやってたんだろな？」

アルとガトウがナギの呪文でクレーターとなった場所を見ながら言う。

確かに、魔力も使っていない普通の銃だった。

弾丸を斬ってもなにも特殊なものを感じなかった。

「不思議な相手だった」

俺はしみじみという。

「なに沈んでんだ！ あいつはもう倒れたろ？ さあ祝勝パーティー
ーでもしようぜ！！」

呑気に言うナギ

はあ、こいつは能天気で良いよ。

俺は立って先に歩き出したみんなの背を追う。

瞬間、殺気を感じて咄嗟に夕風を構える。

しかし、頭部への攻撃はなんとか防いだが上半身と太腿への攻撃までは防げず俺は倒れた。

「」「」「詠春！！」「」「」

みんなが駆け寄ってくる。

どうやら第二라운드의始まりのようだ。

side out

ちっ、仕留めそこなった。

先程詠春を真っ先に殺さなかったのが仇になった。

俺はなんとか転移の護符が間に合って森の中へと逃げ込めたがやればなしは趣味じゃない。

詠春を殺せば原作に影響が出るだろうが知ったこっちゃない

俺が狙撃するとナギ達は瞬時に詠春を回収し木の陰に隠れる。

くくく、楽しい楽しいかくれんぼの始まりだ。

ガトウside

つくづく化け物だ。

俺達は過去…いや、恐らくだが人生最大の恐怖を味わっている。

“死”への恐怖

いままでどんな戦場も、どんな組織も、どんな強者も俺達に味合わすことのできなかったこの感覚

メンバーの誰もが戦慄している。

最強と謳われた俺らがたった一人にやられている。

どうやってあの攻撃から逃げたのか？

興味はあるが今はそれどころではない。

「ガトウ、後ろです！」

アルの声に反応してすぐさま飛び出す。

一瞬前まで居た場所には一発の銃弾が――――――

来た方向へ俺は居合拳を放つが手応えがない。

そう思ったら今度は真横からの狙撃。

今度こそと思い俺はもう一度放とうとしたが真後ろからも狙撃が来た。

反射撃ち

そうか、そうやって様々な方向から撃ってるんだな。

こりゃあ長期戦になるぞ。

s i d e o u t

ラカン side

冗談じゃねえ、なんだよあの化け物

俺様の肉体やゼクトの防御障壁を意とも容易く破り、現在こうやって俺らを追い込んでいるあいては狙撃手

今回の件についてはアリカ姫の依頼とナギの私怨、それに俺らの興味で受けてきたが後悔しまくってる。

もしも請け負った時に戻れるなら本気で自分を殴ってでも止める。

夜、焚火もしないで魔力や気も完全に断って俺らは固まっていた。

夜の間はこちらもなにも見えないが相手もなにも見えないはずだ。

夜が明けたらまた行動再開だ。

翌日、俺らが目を覚ますと完全に夜が明けていた。

やべえ！ 殺される！！

アル side

私はなにを見ているのでしょうか？

目の前には銃弾の嵐

ここは言わば台風の目

数百という弾丸が一発も木に当たることなく弾丸同士のみで弾き合い檻を作っている。

正直言つて、ここを抜け出す方法は誰かが規模の大きい呪文を使つて弾丸をすべて吹き飛ばすしかありません。

それが相手にとっても目的なんでしょう。

癪に触りますが仕方ありません。

「ナギ、お願いします」

s i d e o u t

ナギ s i d e

「ナギ、頼みましたよ」

俺はアルの言わんとするところが解って頷いた。

「とりあえず吹き飛ばせばいいんだな」

俺は様子見で前方にちよつと強力な魔法を放った。

それはもう森に新しい大きな道が出来るくらいの。

それが不味かった。

道は作れたんだ、作るために弾丸を吹き飛ばしたんだよ。

そしたら一斉に飛び交った弾丸が一斉にこっちに飛んできた。

「うわあああああ！」

だけでも俺らには当たることがなく遠くから音がして振り向くと

『サプライズは気に入ったか？』

という張り紙が貼ってある岩を見つけた。

「絶対にいつかぶったおしてやるからな！」

この日、俺達は狙撃手一人に敗北したのだ

s i d e o u t

「俺の通り名おかしくない？」

『厄災の弾丸』の他に『狙撃種』という通り名がついた。

一月前、俺が紅い翼を倒したのがアッという間に世界中に広まり

曰く

『彼の者は狙撃の使い手ならず、狙撃そのもの』

とか

『彼の者の存在こそが銃』

らしい

訳解らないこと言わないで、完全に俺ってば変な人扱いジャン。

聞けば各国が俺のスカウトに燃えてるだとかなんとか。

うん、俺が居れば制空権はとりあえず制したようなもんだよね。

なんでも第三“勢力”として俺が数えられていて…一人なのに勢力
っておかしいよね？

「見つけたぜ『狙撃種』！」

上空からはナギの野郎

はああ、面倒くせえ。

銃撃1（後書き）

グダグダですが感想待ってます

銃撃2（前書き）

ネタがない

銃撃2

時は少し遡り数分前

俺はショックを受けていた

なにせグレートIIブリッジ奪還作戦に間に合わないかもしれないのだ

魔法が使えない俺は空を飛ぶだとかが出来ない

悲しみに暮れながらも走っていると悲鳴が聞こえ助けることにした

現場に着くとワイバーンがエルフの少女を襲おうとしていたのでとりあえず発泡

警告の意味で放った一撃を理解したのかワイバーンは後退る

「嬢ちゃん、食われてないか？」

「う、うむ、助かった」

おや、この子どこかで見た顔だな？

気のせいか

「怪我してんな、見せろ」

俺は顔に付いてる傷に薬を塗ってやる

「う、うむむ／＼／」

「よし、じゃあな嬢ちゃん」

俺はワイバーンに跨がる

「お主、妾の騎士にならんか!？」

「断る」

俺はそう言って飛び去る

「絶対に手に入れるからなー!」という叫びは聞こえなかったことにしよう

着いた時グレートブリッジ奪還戦は既に始まっていた

「はっ! どうやら丁度良いタイミングみたいじゃねえか!！」

戦況は連合国側に傾いてる

いっちょ後押ししますかね

全力で戦場へと飛び出す

「『厄災の弾丸』が現れたぞ!」

連合と帝国に動揺が走る

俺が出るということ

すなわち制空権は全て意味がなくなる

「I a m b o r n o f m y g u n」

この詩に魔法的な意味はない

ただ純粹に意識を集中させるための言葉

いままでのどの戦よりも数が多く

いままでのどの戦よりも激しい

この戦場において俺は独り

助けてくれる者などいない

助ける相手もない

意識の深層へと潜り銃に全てを託す

「制空権は俺のもんだ」

三人称 side

戦士達は見とれていた

両軍の境界線に舞う一人の男

黒くたなびく髪に背おったライフル

両手のハンドガンからは死の弾丸が放たれ続けている

襲いかかる魔法を避け、戦士や召喚した魔を足場に華麗に舞う

『狙撃種』

それはこの世界において最強の“種”である

真祖の吸血鬼よりも高位に位置する存在

たった一人の“種族”

それがこの戦場で猛威を奮っている

紅い翼も出撃しているが苦戦している

「化け物だ」

誰が呟いた

連合と帝国の戦士達は気づいていない

攻撃の対象が両軍とも弾へと向いていることに

それが当たり前過ぎて誰も気づいていない

一人の少年によって戦の流れを完全に支配されていることを

S i d e o u t

戦闘開始から約二時間

弾薬が切れかかってきやがった

このままいけば三十分が限界

早急に離脱せねば

格闘も出来ないことはないが自殺行為だろう

「しゃあない、あばよ！ 帰らせてもらうぜ！！」

「待てよおい！」

ナギがなにか言ってるが知りません

戦況は良い感じで連合だ

両軍の対象が俺になり始めてるし潮時でもある

ふはははは！ 未だに全勝記録更新中であるぞ！！

それにしても：気とか使えた方がいいのかな？

弾を買わなくて済むって話だしねえ

余談ではあるがこの戦で弾の名前はさらに有名になり

一層、銃を扱うもの達から崇拝されるようになったとか。

銃撃2（後書き）

どうする次？

銃撃3（前書き）

今回は短めです

銃撃3

はあい、今回は久しぶりにスナイパーモードです。

前回のグレートブリッジ戦以来俺は戦場では不吉の代名詞となりました。

いままで以上に俺に対して周りの評価が日に日に厳しくなっています。

「Shot」

短く呟き戦場を確認すると戦艦が一つ落ちました。

これですよ、本来は臆病に隠れて狙撃するのが本当なんですよ。

最近の前線にでることも多くて顔も割れちゃったりしてね…今では賞金首さ!!

賞金額2000万Dp

エヴァちん超えちゃった／／／

そりゃあ戦場を掻き乱してんだし？

当たり前っちゃ当たり前か。

ちなみに俺様、この後にもう一つ仕事がある。

むしろそちらがメイン

ヒントはスネーク

わかったな？　なら黙っておけ。

場所は連合本部

標的はガトウ

目的は『完全なる世界』について

ではL e t ' s　G O !

閑話休題

流石に連合本部、警備が半端じゃねえ

俺は裏口の扉の前に居る二人をC Q Cで倒して中に潜入する。

人の流れが多いな。

この人数では絶対に表に出たらバレる、なにかないかと探すと目の前に段ボールがあった。

気づいたら段ボールに入って移動してしまっていた。

馬鹿な、なんだこの安心感は？

一応は道の端っこを通っているが誰も気づかない？

認識障害魔法も使っていないのになぜだ

楽々と人の少ない、なんか重要な場所っぽい通路まで来た。

武装した兵士たちが見回っている。

物陰に隠れて兵士の様子を伺う。

こちらの使えそうな手持ちはサイレンサー付き麻醉銃しかない。

やべえな、これでいくのか…

段ボールは…無理だ。ゲームじゃあるまいし持ち運びができない。

とりあえず歩いてきた兵士をやり過ごし後ろから首を絞めて気絶させる。

倒れた姿を見つけれないように物陰に隠す。

服を奪えばもっと潜入が楽なんだろうが、野郎の服を剥ぐ趣味はねえんだよ！

次に見張り台にいる兵士を麻醉銃で眠らせ一気に通路を駆け抜ける。

そして暇でポケットとしていた兵士を後ろから銃を突き付けてガトウの居場所を聞きガトウの部屋へと向かう。

いくぞ、3、2、1、GO!!

「警察だ！ 手を挙げろ!!」

銃を構えて部屋に入るとアリカ姫にガトウに幼きタカミチ少年

つか紅き翼の御方達

「・・・・・・・・」

『・・・・・・・・』

「すみません、部屋間違いました」

『ちょっと待て!』

息が合った呼び止めなので待ってやる。

「お、お、おま、お前、なんでここに!？」

詠春や、落ち着きなされ。

タカミチ少年、部屋の端っこで震えてないで。

アルビレオは余裕でお茶飲んでるな。

ナギとラカンとゼクトは固まってるし

アリカ姫に至ってはこいつ誰？ って感じた。

「お前、どうやってここまで？」

「うん？ 潜入捜査は結構場数を踏んでるんだ。それよりもガトウや、お土産だ」

俺はガトウに封筒を渡して速攻でここを後にする。

なにやら後ろから「曲者じゃ！」とか聞こえるが今回は無視じゃなくて本気で逃げよう。

ちなみに賞金額が2000万から2500万まで上がった理由は言うまでもない。

ガトウ side

俺は狙撃種に渡されたA4サイズの封筒を開けてしてみた。

すると中には書類が入っており、手紙も同封されていた。

手紙には『真実が書いてある、信じるか信じないかはお前ら次第だ』と書いてあって俺は書類を見る。

「これはっ!？」

そこには『完全なる世界』についてのことが記されていた。

メガロメセンブリアのNO, 2までもがあちら側に?!

まさかありえな…いや、でもそうすると都合があうことが出来てきたぞ。

頭の中で凄い速度で組み立てられるパズル

「奴は本当に何者なんだ？」

ナギ達那不審な顔で俺を見てる。

とりあえずは、みんなと相談しよう。

「みんな聞いてくれ、実は――――」

この後、俺らはフェイトに一杯食わされ指名手配犯へとなってしまった。

s i d e o u t

銃撃3（後書き）

頑張ります

銃撃4（前書き）

面倒だから跳ばしたわけではない

銃撃4

銃は全て装備した

玉の補充は十分だ

札も大量にある

銃の手入れもした

生き残る覚悟もできている

全ての確認をして俺は墓守りの宮殿へと転移する

俺が転移した先は丁度、ナギ達に乗っている船の上

その船の船首へと降りたった

「『狙撃種』！？ 何故貴様がここに！！」

アリカ姫の言葉で一気に味方勢に動揺が走り武器を構えられる

グレートIIブリッジ以降、戦場に顔を出さなかったから完全に俺がこないと油断していたな

「知れたこと、あの宮殿にいる奴を倒しにきた」

あえて振り向かずに戻る

今回はこいつ等と闘いに来たわけではないしな

「マジかよ…興味なさそうに思えたんだが」

「うるさいナギ、それより先に攻撃しても良いか？」

紅い翼の面々が顔を見合せて

「「「「「「どうぞ」」」」」」

ライフルを構えて一気に撃ちまくる

ボルトアクション式のライフルだがずっと使い続けると案外やれるもんだな

三人称side

弾が撃った場所に大きな空間が出来る

それはそこにいた敵を全て撃ち倒していく

「乗り込むならはやく行け援護してやる」

「はは！ それは心強いな！！」

勢いよく飛び出すナギ達

「Shot」

絶え間なくナギ達に近付く魔物達を撃ち抜く

「すごい」

この戦場にいる誰もがそう思った

「行ったな：アリカ姫、俺も行くから残った敵は任せる」

「う、うむ」

弾はお札を取り出し転移した

転移した場所は敵の群れのど真ん中

無言で敵を殺し敵を足場に宮殿へと向かう

役者は揃い世界を掛けた闘いが始まった

墓守り人の宮殿では激しい闘いがいくつも始まっていた

「弾!？」

ナギがフェイトと闘いながら俺に気付いた

「君が『厄災の弾丸』かい？」

「お初に御目にかかる『人形殿』」

ニヤリと笑い奴を見る

「…君はなにを知っているのかな？」

「世界の真実」

「へえ、ここでやるかい？」

「生憎とライフメーカーと闘いに来たんだ」

「正気？」

「もちろん」

それだけ言って俺は先に行く

フェイトもなにも言わずにナギとの闘いに戻る

墓守り人の宮殿深部に俺は着いた

「我を呼ぶのは汝か？」

「御託はいい、ここで貴様を撃ち殺す」

「面白いやってみろ異界の者よ！」

気で身体強化した足で一気に空中に踊りでる俺と創造主

周りでは魔物達と兵士達が激戦を繰り広げているが今はそれどころじゃない

本気でいくぞ

ナギside

「ハアハアハア」

やったぜ、なんとか白髪野郎を倒せた

「みんな無事か？」

「ええ、なんとか」

「辛い闘いじゃった」

アルと師匠は無事

「二人掛かりでなんとかな」

「オジサンには辛いぜ」

詠春とガトウも無事か

「あれ？ ラカンは？」

「それならあそこに」

アルが指した方向にラカンがいた

ボロボロになりながら一人で上を見上げている

「どうしたんだよラカン」

しかしラカンからの返事がない

俺は不思議に思い上を見上げてみると

「なっ!？」

絶句した

空中では弾と最古の魔法使いが死闘を繰り広げていたのだ

弾は周りにいる魔物を足場にしたり転移魔法符で移動しながら戦っている

一方で最古の魔法使いは空中を縦横無尽に飛び回り上級呪文を連発している

なんだよあの闘い

つか弾があそこまでボロボロな姿始めて見た

相手もボロボロだけどあの二人の闘いについていける自信はねえ

「…なあナギ」

「…んだようカン？」

「世界ってのはやっぱり広いな」

「まったくだ」

S i d e o u t

撃った弾数は千を超えた

まだまだ弾薬は沢山ある、だがここは造物主とはやく決着をつけたい

「反射撃ち（リフレクトショット）！」

「リライト！」

銃撃対魔法

決着は未だに着かないと思われていたが

「っ！　なんだこの魔力は！？」

突然、墓守り人の宮殿最奥部から異常なまでの魔力を感じた

「始まったのだ、世界の変革が」

時間切れか――

「…ほんの少し待て」

「それもまたよし」

俺は造物主を一瞥し転移札でナギ達の下へと跳んだ

「ナギ！ お前等アスナ姫は！？」

「助けだしました」

「早くここを脱出せねば！」

俺は全員に転移札を渡す

「さっさと逃げるぞ！」

「助かった！！」

俺以外の全員が転移する

しかし俺は銃に新たな弾薬を詰め振り返る

奴を倒さなきゃ、またすぐにも行動を起こされるのは目に見えている

「悪いが脱出はもう少し先になりそうだ」

さあ、第2ラウンドと行こうぜ

語り side

アリカ姫の下へナギ達が転移すると割れんばかりの歓声が鳴り響いた

「よくぞ無事じゃった！」

ナギにアリカ姫が抱きつく顔と顔を真っ赤にしてあたふたするナギに周囲からは笑いが漏れる

「まったく貴様達が英雄になるとはな…ところで弾はどうしたのじや？」

テオドラ姫は辺りをキョロキョロと探すが姿がない

「え？ そんなはずはないぜ」

ナギ達も兵士達も周りを探すがやはり居ない

「照れて隠れてるんじゃないか？」

詠春が笑いながら言った時

ドゴンッ！！

墓守りの宮殿の上層が突如爆発した

「なにがあつたんですか！」

珍しくアルが声を荒げる

モクモクと立ち込める煙をこの場にいる全員が見つめる

そして――――

「弾じゃねえか！」

煙から飛び出してきたのは二つの影

片や最強の種

片や造物主

二強空中大決戦

間違いなく最強VS最強

「ふはははは！ 異界の者よりおるな！！」

「はっ！ テメエもな！！」

弾幕が造物主に襲いかかるがリライトで消される

リライトを放つが弾丸によって撃ち消される

魔法と銃弾が衝突しあい魔力と血が飛び散る

「はあっ！」

造物主の一撃で俺は戦艦まで吹き飛ばされる

人間の体である弾にはもう一撃を放つ気力と体力しかない

『弾!!』

近寄ってくるナギ達を気にせずに俺は壁に寄り掛かりながらライフ
ルを前に持ってくる

「I a m b o r n o f m y g u n (体は銃で出来ている)
」

唱えるは魔術的な意味のない詩

「(心は弾で血は弾薬)」

意識を深層の更に深くまで潜りこませる

「死ねえ！ 異界の者よ!!」

造物主が今までにないほどの魔法を放つ

「(屍の上で一人、勝利に酔う)」

全ての力をこの一撃に籠めるために詩う

「(ただ一度の敗走もなく、ただ一度の誤射もない)」

ゆつくりとライフルを構えてスコープを覗き

「（故にその生涯は弾であり）」

引き金に指をかけ

「（その身体は銃でできていた）」

深層心理までもを狙撃のことで満たす

「Shot」

それは理を貫く一筋の弾丸

造物主の魔法のレーザーの中心に当たり貫く

そしてその弾丸は造物主の真中に当たり胸を貫いた

「ばか…な…」

「またな造物主、次は酒でも飲んで語り合おう」

此度の最強同士の闘いは銃へと軍旗をあげて終了した

賞金首 弾

賞金額 3200万Dp

『厄災の弾丸』『狙撃種』『久遠の旋律』『孤高の帝王』

史上最高額の賞金首であり

史上最高の“英雄”の誕生であり

後世まで語られる伝説である

銃撃4（後書き）

もうすぐ第一章が終わります

銃撃5（前書き）

短
か
っ
？
（
。□
。；
）

銃撃5

語りside

「ついに終わったのか…」

誰かが呟いた

長きに渡る闘いは終わり世界は一つになり仮初めかもしれないが一時の平和が訪れた

そう誰もが思い喜び

口々に「紅き翼万歳」「狙撃種万歳」と声高々に叫ぶ

「やっと終わったんだな弾！」

ナギ達も嬉しそうにはしゃぐ

「……いいや、最後の仕事が残ってる」

だが弾だけは厳しい顔をしてとうに限界を迎えている身体を無理矢理起き上がらせる

「弾さん駄目です無理をしたら」

「タカミチ少年か…：そういや昔聞いてきた『なんで詠唱も出来ないのにそこまで戦えるんですか』って質問に答えてなかったな」

弾はヨロヨロと歩き船首に立つ

「今、その質問に答えてやる」

そしてホルスターから数々の死地を共に乗り越えてきた相棒である
二丁のハンドガンを勢いよく引き抜いた

「簡単なこった、例え魔法や陰陽道が使えなくてもドデカいなにか
譲れないものを持つてるから強えんだ」

言い終わると同時に墓守りの宮殿から異常までの魔力の塊が出てきた

「最後の仕事だ…あとはみんな頼んだぜ」

弾はそう誰かに問いかけて虚空へと転移した

S i d e o u t

銃痕眼で魔力の塊を診る

くくく、運がいい

俺の目の前には人の頭ぐらいの大きさの黒い一つの点

つまりここを撃てればこの魔法を撃ち抜けるわけだ

残念だったな造物主…我が宿敵^{ライバル}よ

今回は完勝させてもらうぜ

俺が放った銃弾は見事に魔法を撃ち抜き俺はその時にできた魔力の

渦に飲み込まれた

周りから俺を呼ぶ声が遠くから感じる

最後に俺は右腕を掲げて姿を消した

銃撃5（後書き）

もうそろ原作にいきたい

銃撃6（前書き）

お久しぶりです

銃撃6

??? side

助けて欲しかった

村では炎が立ち込めている

紛争の被害にあった村だ

向こうの方から十人ぐらいの兵隊がやってきて私に発砲しようとしている

ああ、私も死ぬのか

心は病み、死への恐怖はそれほどなかった

しかし私の運は尽きてはいなかった。

「ぐわあっ！」

「ごふっ！」

一瞬のうちに銃殺される男達、なにが起こったかはわからないが誰がやったのかはすぐにわかった。

燃え盛る街をまるで散歩するかの如く歩いてくるフードを被った男がいた。

「――――強くなりたいか？」

壁にもたれ掛り意識も朦朧とし始めている私に男は問いかけてくる。

「――――強くなって復讐をしたいか？」

その声は私の心の奥底へと響いてくる。

「わ、私は」

知らないはずの男に向かって叫ぶ

「強くなって、強くなって、復讐をする！」

それを聞いた男はニヤリと笑って二丁の銃を渡してくる。

「そのハンドガンは俺が愛用してる銃の最新式だ、お前にやる」

そうして私を置き去りにして歩き出す男

「ちょ！ 連れて――――」

「俺の名は弾、精々強くなって俺らのステージまで登ってきな」

慌てて追いかけようとしたが男は転移してしまった。

この日から私の目標であり、憧れである、弾という人物の背中を追いかけたのだ。

「むう、う、ん」

随分と懐かしい夢を見た。

私は去年麻帆良にやってきて中学の二年A組になってから約半年が経った

クラスの連中もメンバーは変わらなかったし気楽だ。

私は制服に着替え、あの時渡された私の二つの相棒を隠し装備して登校する。

あれから約十年、あの男のことを調査した。

すると彼が英雄であり歴代最高の賞金額を誇る賞金首だということがわかった。

賞金首であるが世間からは英雄扱い

卑下する人間も少なく…憎んでる相手は多いけども基本的には嫌われてはいない。

攻撃するのも害意があって攻撃してくる者だけらしいので悪い相手ではないようだ。

「おはよう、みんな」

「真名、おはようネ」

「おはようでござる」

彼女達は古と楓

わからなかったら原作をみてくれ。

クラスでも仲が良い二人だ。

「うん？ なにやらクラスの雰囲気がおかしいな」

「それは新任の先生が誰か気になってるのだろう」

疑問に答えてくれたのは刹那、境遇が似てることから一番仲が良い相手だ。

「担任は高畑先生じゃないのか？」

「それがなんでも、副担任で新しく先生がくるらしいぞ」

ほう、それは楽しみだ。

どんな相手か気にしながらも私は寝る準備を開始した。

S i d e o u t

やはあ、十年振りぐらいかな君達？

あの魔力に飲み込まれた後についてはまたいつか語るさ

それよりも俺は教師として働いてるんだ

四年間は海外の大学で教えてたから新人ではないっす

そんでその大学に偶々やってきた明石教授に誘われて麻帆良で先生をやることに

学園長と話した結果で俺は女子中に赴任

タカミチのクラスの副担になる

しかし、あれだなあ

認識阻害と数年振りだからってまだ俺に気づかないなんてボケたか？

随分と老けやがって…

とにかく俺の正体は気付かれてないので裏の事情には関わっていない

「うう、緊張するぜ」

「ははは、弾視君^{はずみ}リラックスだよ」

くっ、こいつ本気で気づいていやがらねえ

一応は一つ歳上なんだけど

まあいいか、早く入ろう

真名Side

私は余りの眠さで意識が朦朧とし始めていた

もういつそのこと寝てしまおう

私は意識を手放そうとした直前で新任の先生が入ってきた

「皆さん初めまして、今日からこのクラスの副担をやらせていただきます弾視です。よろしく」

私の意識は急激に浮上し勢いよく立ち上がった

「ま、真名どうしたネ？」

古が驚いているがそれ以上に私も驚いていた

あの人は、間違いない

「あゝ：とりあえず座ってくれるかな龍宮君」

私は素直に従い着席する

「自分の担当は主に人間学です、その他に担当の先生がいない授業も受け持たせていただきます」

「はゝい、質問」

「なんですか朝倉君？」

「人間学ってなに？」

「社会や世界で人が必要とされることを学ぼうって授業です、色んなことをやりますよ」

確かにこの人程に密度の濃い人生を送ってきた人は少ないだろう

「年齢は！」

「秘密です」

「日本人？」

「うん、生まれも育ちも日本です」

「なんか武術やってるアルか？」

「昔はヤンチャ（戦争）もしてたけど最近は余りだな」

一部武術関係の人間が目をキラキラさせる

一方で私とエヴァンジェリンは眼光を鋭くさせる

どうやらエヴァンジェリンも気づいているようだな

これからが楽しみだ

とりあえずは放課後にでも弾さんと話しをしてみよう

S i d e o u t

昼休み、俺は呼び出され屋上にきた。

「単刀直入に聞くが貴様は『久遠の旋律』か？」

「またマイナーな方の二つ名だな『闇の福音』」

俺は『狙撃種』として答える

「むむむ、ちゃんと認識阻害のアイテムつけてるんだが…二流品か？」

「いいや、一流品だよ。ただ私や龍宮には効きにくいだけさ」

「やっぱりバレてるんだよなああの反応は」
うむと頷くエヴァ

「しかし彼の有名な『闇の福音』に名を知られてるなんて光栄だな」

「ふん、大英雄にして賞金額4800万の歴代最高額の賞金首の名を知らん奴なんておらんさ」

なぜだ、また賞金額が増えちよる

「私としては龍宮が知ってるほうが驚きだがな」

暗躍するのに学園側に正体を知られるのは大変マズイ

あの狸ジジイにも利用されるのは目に見えてるし

「交換条件としてエヴァ、呪いを解こうか？」

「なに！？ 貴様に出来るのか！！」

詰めよってくるエヴァ

「勿論だ、ちゃんと登校地獄と学園結界の二つの呪いを解く代わりに願いが幾つかある」

「……いいだろう、聞いてやる」

エヴァの了承は受けたが信用しても良いものか

「安心しろ、悪魔の契約書がある」

なら心配はないな

「一つ目は学園側に俺の正体をバラさないこと。二つ目は――――」

俺の話を聞きエヴァは面白そうだと言う顔をする

「ほう、それで私はお前に協力をすれば良いのだな？」

「ああ、力も隠せよ？」

くくく、と悪どい笑いを浮かべる俺とエヴァ

これが歴代一位と二位の賞金首が手を組んだ瞬間だった。

真名 side

放課後、私は弾視さんの下へ訪れた

「おお、龍宮か。どうしたんだ？」

弾視さんはこれから新田先生と校外警備に行くらしく新田先生を待っていた

「お久しぶりです：あなたは覚えていないと思いますが」

「ははは、もしかして俺が銃をやった嬢ちゃんか？」

え？ 覚えてくれてたのか？

「俺が銃をやったのはお前だけだよ。覚えてないはずがない」

それを聞き私は嬉しくなった

「こ、これから一緒に働けるんで「残念ながら俺は学園とは協力していない」ならどうして：」

弾視さんは目を閉じて口を開く

「これには訳がある、俺に協力するのと俺の正体を誰にも言わない

と誓うなら教えて「誓います」即答!？」

ふふふ、弾視さんと協力できるなら悪魔とだって契約するさ

弾視さん、もとい弾さんは私達、銃を主武器に扱う戦士にとっては
神に等しい存在だ

全ての狙撃者が崇拝してると言っても過言じゃない

「まあいいか、なら計画の話は週末にエヴァの家で話す」

「はいっ!」

これが私の麻帆良での物語の始まりだった。

S i d e o u t

銃撃6（後書き）

跳ばした訳は後々に明かされます

銃撃7（前書き）

今回はずっとお説教ターン

銃撃7

あの別荘での誓いから数ヶ月、俺は昼休みの校庭を見ていた

ネギは既にやってきていて今はウルスラ高の女とうちのクラスの生徒との喧嘩をネギが仲介に入ったところだった。

俺は職員室から急いできてと言われたからきたんだが…止めるか

「そこまでだ、両者矛を収めろ！」

俺が珍しく声を荒げると全員がビクリしてこちらを振り向いた

「は、弾視先生」

ネギが泣きそうな表情でいる

「君達はウルスラの女子だな、なぜ麻帆良中に居るかと争いの原因を誰か代表者が説明しろ」

出てきたのは雪広とウルスラのリーダーみたいな女子

「なるほど、神楽坂とりあえず謝れ」

「なんでですかっ！」

意味が解らないと言わんばかりに大きな声だ

「理由はどうあれ安い挑発に乗って先に手を出したのはお前だ」

「うっ」

声を詰まらせる神楽坂、それをニヤニヤと見ているウルスラ女子

「ウルスラもだ！ 君達は高校生だろう、学校間での授業中の不意な干渉は禁じられているはずだが：そちらの指導教員の先生にはこちらから伝えておく、なにかしらの処罰があるから覚悟しておきなさい。今回は互いに手を出してしまったのが悪い」

「……はい」

大人しく帰っていく高校生達

俺は生徒達に振り返ってニヤリと笑ってやる

「ま、気持ちはわかるよ。次は暴力以外でもっと上手く仕返ししよう」

「暴力以外のですか？」

神楽坂が不思議そうな顔で見てる

「そ、挑発も駄目だぞ。問題にならないように、正々堂々とだぞ」

神楽坂の頭をくしゃくしゃと撫で、後のことはネギ先生に任せて俺は職員室に戻っていく

するとタカミチが笑顔でこちらを見てきた

「や、弾視君お疲れ様」

「はぁ、高畑先生が止めてきてくださいよ」

呑気に茶を飲んでるとは良い度胸だなこの野郎

「いやいや、行こうとしたら弾視先生が先に出てっちゃってね」

多分だけど狸ジジイ（学園長）に様子見とでも命令されたのだろう
それにタカミチはきつと神楽坂が魔法の存在を知ってしまったこと
を知っている

全ては英雄を育てる為に

神楽坂をネギの従者にするつもりか

近衛も候補の一人だろう

というか変わり者ばかり集まった2－Aの生徒全員が従者候補

原作でも最終的にはクラスの半分以上の生徒がネギと仮契約してた
もんな

気にいらねえ、いつそこでタカミチだけでも行方不明にしてやろ
うか？

そう思った時だった

「弾視先生、またウルスラの女子が来たよ」

職員室に龍宮が入ってきた

「え？　今は授業中だよ？」

一応、職員室なのでお仕事モードな喋り方

「それが、向こうの言い分では自習でオリエンテーリングとかなんとかで」

仕方がない、行きますか

とりあえず俺が着くと決着がついていた。

どうやらネギ達が勝ったようだが神楽坂に後ろからボールを投げようとしている女子の後ろ姿を発見した

「そこまでだ」

ガシッと俺はその女子の腕を掴んで止めさせる

『弾視先生?!』

俺の突然の登場に全員が驚いている

「不意打ちは関心せんな、それにお前らは自習だろ？　なぜここにいる」

「そ、それはオリエンテーリングの為に…」

「ふざけるな!!」

『っ!』

俺は怒っている

誰も喋るところか顔を背けることすらできない

「まだ校庭や運動場は余っているはずだ、それにこいつらは授業のためにここにいる。オリエンテーリングと授業、どちらが優先されるべきかは分かるだろう!」

しゅんとするウルスラ女子

「ネギ先生もだ。スポーツで和解させようとするのは良い案だが場合をわきまえなさい! あなたは確かに十歳だが教師としてここにきているんだ。そうならば社会人としての責任感を持て!!」

はああ、俺は説教キャラじゃないのになあ

あまり目立ちたくもないし

後は新田先生に任せて俺は退散するか

「以上だ、解散!」

はあ、もう嫌だ。

銃撃7（後書き）

むう、なんかいまいちだぞ

銃撃8（前書き）

みんなー、オラにアイディアを分けてけろ

銃撃8

ネギside

昨日からずっと考えていたことがある

弾視先生の言葉だ

どうしてか僕の中にズンと入りこんできて悩ませる

チラッと横を見る

朝の職員会議を気だるそうに聞いている弾視先生

不思議な人だと思う

飄々としながら時折別人かと思う程の顔を見せる

これが表と裏の顔ってやつなんだろうか？

大人って不思議だ

Side out

やばい、めっちゃくちゃ眠い

原因は朝にある

龍宮：真名が朝方、まだ俺が眠っている時間に部屋にやってきたことである

俺の部屋は女子寮の管理人室

これは俺がここに来てからずっとなので今はなんとも思わない

最初こそ魔法関係者だとバレて、この女子寮に来させられてかと疑ったりもしたがどうやら違うようだ。

俺はどうやら密度の濃い生を送ってきたと思われているのか皆から相談役として扱われている。

女子寮では恋の話が比較的多い、男性としての意見だから重宝されているらしい。

生徒達からも幸い頼りにされており恋の話だけでなく毎日、愚痴や人生相談を受けている

そして常連なのが真名と長谷川

二人とも我がクラスの生徒である

正直前者はどうでも良いが後者は当初より懸念していた通りである

認識障害が聞いていない

体質なのかあるいは：いや、詮索はよそう

しかし困った、彼女が真実を知るのは約半年後

それまで苦しめるのは気が乗らない

かと言って此方側に引き込むつもりもない

本来俺はフリーで闘うのを主としている

今回の共闘だって本当ならしたくなかった

だがこれも計画の為

とにかく長谷川のことは後回しにするか

下手に原作壊して造物主が早めに復活とかは洒落にならん

「てな訳で、高畑先生が出張の為に僕が代わりにやってきました」

『よっ！ 待ってました！！』

拍手で迎えられる

ふふふ、気持ちが良いぜ

「はいっ、授業を始めるから神楽坂も不貞腐れないで」

「ふ、不貞腐れてません！／＼／＼」

嘘つけ

さっきまでこの世の終わりみたいな顔をしてたじゃないか

「じゃあ教科書しまうと見せかけて開いて」

『どっち!?!』

息ピッタリだな

とにかくだ、原作に介入しながら造物主の対策をとろう

せいぜい悲劇になるぐらいのことはするのも良いな

俺は物語の大筋を描きながら授業を進める

まずはエヴァにネギと闘ってもらって負けてもらうか

だがあれは進級してからのイベントだったな。

ならばそれまで待とう

キングクリムゾン!!

てな訳で三年生になりました

俺は真名と一緒にエヴァに別荘へと集められた

「爺にネギと闘うように頼まれた」

とうとうか、これでようやく動き出せる

「エヴァ」

「わかっている封印が解けたことをバラすようなヘマはしてないし
しないさ」

それなら安心だ

まだバラす時期じゃない、まだなんだ

「で、弾さんはどうするんだい？」

「適度に手を出す、ちゃんと遠見の魔法を誤魔化す魔法具を使って
遠くから狙撃するさ」

ジジイの思い通りにはさせたくない

別に白き翼が誕生しようがしまいがどうでも良い

だけでもなあ

「英雄の息子として将来を期待されながらも甘やかされて育ってきた少年、そいつが“英雄”として成長する為に色々な大人達が様々な思惑で動いている」

「MMもですか？」

「むしろここは連合の管轄、MM主体だろう」

「では逆に私達の計画には」

「ああ、好条件さ」

ニヤリと悪どい笑みを浮かべる俺ら

「ジジイ達がネギに経験を積ませたいなら積ませてやろう、代わりに奴等は私達の掌の上で踊ってもらう」

簡単には行かないだろうがな

「あ、そうだ弾さん副担から外されちゃったんだっけ？」

そうなのだ、タカミチに取られた

だからと言って俺の仕事は減らない

自分の授業以外も休みでない先生方の授業も代わりに入らなければならぬ

なので全学年全教科の進行度合いを知らねばならない

三年生を主に教えているが人間学が予想外に教師生徒共に人気なので去年よりも授業単位増えたし

信用はされているのだろうか…とにかく疲れる。

特にタカミチの野郎だ！ あいつ悠久の風の仕事で忙しくてほとんど麻帆良にいやがらない。

いつかその時が来たら撃ちまくってやる。

あとネギ！ あいつの尻拭いも何度してやったことか！！

でも良いんだ、今学期からは学園長に言われてもやってやらないんだから！

甘やかすのは嫌いだし、ネギ自体が好きじゃないし。

魔法使いの修行じゃなくてここには教師としてやってきているんだ。

担任を任されてもいるんだしちゃんと仕事してもらわねば。

だから俺のところに仕事を回されても自分の仕事しかやってない。

まだ量が少なくて学校経営にも影響はあまり出ていないが早くしないと不味いことになる。

人間一度は痛い目にあわないと心からの学習はしない。

天才少年で英雄の子として育てられた。

自分の思い通りにならないことなんてなかっただろう。

天狗になっている、その鼻を折ってやる。

「まあな、でもその分やりやすくなったさ」

「：じゃあ、私にも」

「駄目だ、狙撃種になりてえんだったらもっと強くなってからこい」

前々から話していたことだ。

真名は魔眼持ちであり、しかもその眼が解析能力に優れている魔眼なのだ。

これを伸ばせばもしかしたら『銃痕眼』の領域まで届くかもしれん。それに真名は俺と違って魔力や気の量が平均以下ではない、むしろ多いほうだ。

これは凄いことになるやもしれん。だが俺は現段階で技術を教えるつもりはない

過ぎた技術は宝の持ち腐れにしなければならない

「せめて反射撃ちで弾を最低でも四回は弾けるようになってこい」

「うう………わかりました」

落ち込む真名

今はエヴァの話しを優先するか

「エヴァ、負けて欲しいんだがその時に」

「ギリギリであたかも激戦を演出してほしいんだろう？」

流石エヴァ、分かってらっしゃる。

「そうだ、ここでネギが勝てばネギに更に大きな自信が付く」

「もとよりあの坊主は自信の塊であろう？」

「違うぞ、自信ではなく慢心の塊だ。だからもっと塊を大きくしてやる」

「なぜ…ってなるほどなあ」

なにかに勘付いたらしくエヴァが意地の悪い笑みを浮かべる。

「よし、ならばやってやろう」

こうして俺の計画の第一段階は始まった。

銃撃8（後書き）

ふふふ、次回はなんとネタが浮かびません！！

銃撃〜主人公設定〜（前書き）

Fate 風に主人公の紹介をしました。

今後設定が増えるかも…

銃撃く主人公設定く

名前
弾^{ダシ}

現在は弾^{ハズミ}視と名乗っている

身長175cm

性格 混沌

武器・銃火器全般

筋力 B

俊敏 A

魔力 D

耐久 B

幸運 B

宝具 A

スキル

【撃鉄の申し子】

己が手、もしくは体の一部で武器と認識した銃火器の使い方が頭に流れてくる。

【銃痕眼】

発動した眼で見た対象のどこを撃てば一番良いかを教えてくれる魔眼、直死の魔眼のように即死ではなく致命傷や重傷を負わせることもできる。

【孤独な戦士】

一人で戦う場合、全てのステータスが一上がる。

見た目のイメージは戦国BASARAの伊達正宗的な感じ、冷静な判断を常に下すが燃える時はとことん燃える

案外家事が得意。

憧れの人は天元突破グレンラガンのカミナ兄貴

大戦では帝国と連合国の二大国を相手に戦った男、紅き翼とは敵対関係であった。

懸賞金が4500万という原作でのエヴァの賞金額を遥かに上回る賞金首である。

しかし『完全なる世界』との戦いで造物主を下し消滅魔法を抑え込んだことにより英雄となる。

賞金首の撤回も考えらたが紅き翼の面々の要望や諸々の事情などで
などが却下。

最後の戦いの後、行方を晦ましていた弾^{はずみ}だったがネギが来る数か月
前に教師として弾視と名乗りやってくる。

超一流の認識障害魔法の魔法具を身に着けており、真名とエヴァに
しか正体を知られていない。

只今、計画とやらの為に暗躍中

銃撃く主人公設定く（後書き）

こんな感じでどうですか？

ご意見感想お待ちしております

銃弾9（前書き）

ここから二、三話はお説教、もとい諭しターンです

※戦闘をご期待の方は今しばらくお待ちください

銃弾9

「くくく、見たか今日の坊やの顔を？」

俺は知らなかったが昨日の満月の晩、エヴァがネギを襲ったらしい。それで自分が真祖の吸血鬼だと知られて相当ビビってるネギに大満足らしいのだ。

「いや、ずっとあの調子で教師陣としては非常に面倒くさかったのだが」

副担任の仕事も結構な量を押し付けてやつ…ゴホン、担任の仕事が溜まっていたしあの小僧ってば生徒に授業で勉強を教えるだけが先生の仕事だとか勘違いしちゃってたもんな。

「む」

「…誰だ？ この距離で学園結界を通過したことを気づかれるんだから大した奴ではないと思うが…」

この時期に侵入者って多分、エロオコジョだろうな。

てことは明日ぐらいには茶々丸襲撃か？

いかなな、今日中に明日の分の仕事まで終わらせようつと。

翌日、俺は時計台の上からライフルのスコープを覗き込んでいた。

もちろん認識阻害&遠見の魔法などの妨害魔法がある魔法具を身に付けている。

スコープの先には茶々丸がいる、丁度猫と戯れているしそろそろ野菜とバカレッドがやってくるはず…おっ！

そんなことを考えているとようやく野菜達が姿を現した。

なにやら言い争って、バカレッドが茶々丸と戦いだし…うん負けたねバカレッド

野菜小僧がそれに反応して魔法の射手を放った。

ったく、馬鹿じゃねえのか？

茶々丸は突然のことで反応が出来ていない、野菜も魔法の射手の軌道を変えようとしているが間に合わないなありや。

「仕方ないか……」

ため息を短く吐いて俺は引き金を引く。

茶々丸に魔法の射手が当たる直前放った弾丸が当たり魔法の射手は四散した。

野菜とレッドとエロオコジヨは訳が分からない顔をしている。

茶々丸は理解したのかこちらを見てきた。

距離にして約六百メートル、だが茶々丸なら俺の姿を見れるだろう。

なんせガイノイドだし？

俺はVサインをだすと小さく茶々丸がお辞儀をしてきた。

んじゃ、そろそろ俺も登場するかね。

茶々丸 side

時計台の上から狙撃してくださった弾視先生に私は小さくお辞儀をする。

顔は仮面で隠れてしまっているからわからないがああ、の雰囲気は間違いない。

不思議なお方だ

『厄災の弾丸』 『狙撃種』 『久遠の旋律』 『孤高の帝王』 etc
tc

賞金額は3200万Dp ドルでも4500万のマスターを遥かに
超す賞金額の持ち主

彼の大戦では世界中の国と戦い勝利を重ねてきた“最強”

人間の身においてマスター達、“最強種”の一角を担ってしまった記録によると30は超えているはずなのだが：

本人の体をスキャンしたりしてみたが22歳と判断された。

謎が多い御方だ。

「おやおや？ ネギ先生、神楽坂君とデートですか？」

「え？ あっ、弾視先生こんにちわ！」

やってきたのはスーツ姿の弾視先生

ちなみにだが“弾”としての学園での記録は私が自主的に削除している。

超さん達にも正体を知られたくないらしいのだ。

「おや、茶々丸君も…ネギ先生ったら両手に華とほうらやましいですね」

「ちょ、弾視先生ってばこれはデートじゃないです！」

神楽坂さんが顔を赤くして慌てている

「あらら、それは僕が勘違いしてしまったようですね」

先生としての演技も最近は板についてきました。

「ふふふ、神楽坂君をからかうといつも面白い反応をくれますね」

「うう、二年生の頃から思ってたけど先生ってばやっぱりSだわ」

「失敬な、否定はしませんが」

「しないんだ!!」

ああ、本当に楽しそうに笑っていますね弾視先生。

「それはそうとネギ先生」

「は、はい！」

突然呼ばれたことで驚くネギ先生

「実はですね、今日は君にお説教しに来ました」

「え？」

なにを？ という顔で弾視先生を見るネギ先生

「君は子供とは言え教師です、社会では任せられた仕事をしなきゃ
いけません」

「は、はい」

「じゃあ先生の一番のお仕事はなんですか？」

「そ、それは生徒達に勉強をおしえ「残念、違います」え？」

「分かってませんね」と首を振りネギ先生へと向き直る。

「それについては明日の研修授業にでも言うつもりでしたから良いですが先生のお仕事は授業だけではありません。それは書類仕事であり、指導の為の見回りであり、生徒からの相談であり、色々あります」

なるほど、正論でネギ先生に教師としての自覚を持たせるつもりですか。

「ネギ先生は書類仕事を知らなかったとは言え、やっていますので凄い量（副担任の分まで）があります。まだ取り返しがききますがこれ以上は学校運営や生徒の進路にも関わってきます」

「つ、つまりは…」

「はい、仕事（副担任の分まで）をさせにきました」

ガシッとネギ先生を掴んで連行する弾視先生

「神楽坂君に茶々丸君、明日も遅刻しないようにね。ちなみに明日の2－Aの授業は全部人間学になりますから」

そう言って残されたのはポカンとしているだけの私と神楽坂さんだけでした

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「……一緒に猫に餌でもあげますか？」

「……うん」

少しだけ私と神楽坂さんの間に絆ができました。

s i d e
o u t

銃弾9（後書き）

俺ならすぐに次話を投稿できると信じている。

銃撃10（前書き）

文が滅茶苦茶だ。

銃撃10

ぐわぁゝ、だりい！

ニーハオ、弾視です☆

…ごめん、キャラ的にあってなかったわ。

今日は土曜日なのに俺は授業がある、しかも四時間も

「ははは、今日は楽しみにしてますよ弾視先生」

「むうゝ、なら終わったら一杯ぐらい奢ってくださいよ新田先生」

「そうですね、焼き鳥でもいいきますか？」

おお、話がわかりますな先生

萎えきっていた俺の心が少し蘇った。

実は俺の担当科目である人間学、いつのまにか世界から注目されていたらしい。

ハーバードでも一度、講師として来てくれなにかとお願いがあった。

二週間は向こうで滞在することになってるし。

そんなこともあったりして麻帆良の先生達が俺の授業を見たいと言

ってきやがって学園長が許可を出した。

そのせいで！ 土曜日なのに四時間も授業をする羽目に！！

「…本当に皆さんには迷惑をかけますね」

俺は朝のHRで3－Aのみんなに謝る

「いや、私は別に構わないぞ案外タメになってるしな」

「おお、あの毒舌の千雨ちゃんからお褒めの言葉が…やったね先生！」

ええ僕もビックリですよ、まさか千雨ちゃんからお言葉を貰えるなんて。

原作通り、認識阻害がかかっていない千雨ちゃんは空気のように影を薄くしていますからね。

「皆さんありがとうございます。さて、連絡事項ですが明後日の月曜は振替で休みになります、やりましたね皆さん」

『イエーイ！』

まあその分が今日なんですけどもね。

「あとですね…今日この教室には沢山の大人達が来ます」

「大人達とかなんか生々しいね」

早乙女の言葉は華麗にスルーしてっ

「ですが皆さんには特別することはありません、寝てもいいし、喋ってもいいし、いつも通りに授業を受けてくれればいいです」

「おや？ 意外だね、私達がちゃんと受ければ先生の株は上がるのでハ？」

超の言い分も分かるが違うんだなそれが。

「だってそんな皆が黙って先生の話を聞くだけなんてつまらないでしょ？」

「良いこと言ったネ先生！」

「古君、でもちゃんと勉強はしましょうね」

そんなこんなで話していると廊下から多くの気配がやってきた。

「そろそろですかね、じゃあそろそろ始めますから一日お互いに頑張らしましょうね」

『はい！』

んじゃま、やりますか。

教室に入ってきたのはネギやタカミチや新田先生、それに小学校から大学までの教師達がやってきている。

あっという間にクラスの後ろ側が満席となった。

基本的には魔法先生が来ているのだ、参加希望者が多いかったので人数を限定させてもらった。

もちろんうちの学校の教師を除いてはだが。

俺が仕組んで魔法先生を大量に來させた、って学園長も来てんじやん。

「じゃあ始めましょうか、今日は四時間もあるのでのんびりとやっていきましょう」

俺は気にせずに授業を始める。

「皆さん、今日はどんな話がいいですか？」

「麻帆良祭の出し物について！」

「最近の流行について！」

「オシヤレ！」

「科学についてネ」

「あの：料理についてが良いです」

「武術についてネ！！」

皆がこぞって手を挙げまる、活気があっていいね。

「残念ながら最初は正義についての話をします」

俺の言葉にほとんどの先生が表情を変える。

『意見を聞いた意味がない！？』

うむ、このツツコミは中々のシンクロ率だな。

「皆さんに質問です、あつ先生方も参加なさってどうぞ」

あくまで自然に参加を促しておく。

「あなたは異世界に突然行ってしまったお話とかでよくある勇者です。あなたは普通の人間よりも強い力を持っています」

魔法先生達が険しい顔をしてきた。

「ある時、あなたは悪の魔法使いという存在を知りました」

今度はエヴァが険しい顔をする。

「世界中のみんなが『あいつは悪だ』『あいつは悪だ』『あいつは悪だ』と言っています。その証拠に悪の魔法使いには懸賞金がか

られ指名手配もされています」

魔法先生達がエヴァをチラッと見ます。

「しかしその魔法使いは英雄と呼ばれた人達に力を封印されてしまった」

エヴァがこちらを睨んできますが俺は気にせず話を進めていく。

「それから数年、あなたはある街で悪の魔法使いを見つけてしまいました」

くくく、魔法関係者が凄い顔をしてるね。

「その魔法使いは今も復活を狙っていますが力を封印されている魔法使いはただの人と変わりません」

「ですが魔法使いは既に復活のための方法を知っています。そして知っていることをあなたは知りました」

「まだ封印は解けていませんがもう少しで魔法使いは復活してしまいます」

そこで俺は一度みんなを見渡して

「さてここで質問です、あなたは魔法使いを殺す力を持っています。さああなたはどうしますか？」

あくまでも自然に言う、これで少しは俺にも魔法の関係者なのではないという疑いが掛けられるだろうが関係はない。

だって二週間もアメリカに逃げるんだもん♪

「じゃあ殺すっていう人は手を挙げて」

すると教師と生徒の大半が手を挙げた。

「逆に殺さないって人は？」

ほんの極少数の人間は手を挙げる。

「うん、じゃあなんで殺すのかな明石君」

「そりゃ、だって復活したらまた多くの人に迷惑がかかるんでしょ？」

「なるほどなるほど、ではガンドルフィーニ先生はどうしてですか？」

「決まっている、悪があり倒す力があるのだったらそれを使うのが正義だ」

それに頷く魔法先生一同

「ほうほう、ではでは今度は反対意見を聞きましょうか。椎名君」

「うーん、だって私その人のこと知らないもん」

ピクリと反応するエヴァ

「知らない？」

ガンドルが椎名の質問に反応した。

「うん。だって私は『みんなが悪の魔法使いだって言ってる』ことしか知らないからなにをしたかも知らないしもしかしたらその人が実は良い人かもしれないでしょ？」

「そんなわけがないだろう！」

ガンドルと椎名が論争を始めるとそれが飛び火して他の皆も意見を交わしだした。

次第にそれは熱くなり、“正義と悪”について真剣に皆が考え出した。

そこでチャイムがなって一時間目が終了する。

「はい、皆さん。一時間目はここまでです、続きは次の時間にで」

そこで俺は一旦話をやめさせる。

そして俺は外に出た。

「ふう、みんな良い感じで熱くなってますね」

「ふおおおおお、そうじゃのう」

反対側の扉からは学園長とタカミチ、それに瀬流彦がいた。

「おや、学園長方は話には参加なさらないので？」

「うむ、ちとこの老体にはきつくての」

嘘つけジジイ

「ところで弾視先生、あなたは関係者かい？」

ストレートに聞くねえタカミチ

「関係者？」

「……いや、なんでもないよ」

まあ疑いたくもなるわなそりゃ

「しかし、生徒と教師で正義についての口論をさせるなんて無茶苦茶ですな弾視先生は」

「瀬流彦先生、時にはこういう風にした方がいいこともあるんですよ」

「自分達で考え、考えたことを違う者達と言いあい、そして自分達でまたそのことを考える」

「ふおおおおお、教育者として生徒に自分で考えさせる力をつけるのかの」

「はい、柔軟な思考は大切ですから。っとそろそろ授業再開ですね」

俺は教室に戻る、あと三時間か：頑張ろう

結局あの後、二時間も議論が続いてしまった

で、四時間目

俺は皆を落ち着かせてから話し始める

「皆さん、結論は出ましたか？」

「ううん、出なかった」

椎名が不満げな顔でこちらを見てくる、なぜに俺を見る？

「そうですね：実はこの質問の正解はもう出てるんですよ」

『え?』

この言葉には全員が驚いたらしい

「殺すか殺さないか、この二択はどちらも正解であり不正解なんです」

「なんですか!？」 悪は倒さねばなりません!」

グラヒゲが叫ぶ、ガンドルじゃないのかよ。

「いいですか皆さん、皆さんが選んだのは“皆が悪だと言っている魔法使いを殺すか殺さないか”です。ではこの魔法使いは本当に悪なのでしょうか？」

「そうに決まっているでしょう」

「ふふふ、ガンドルフィーニ先生も同じ意見ですか？」

「はい、そうです」

グラヒゲとガンドルは頷く

「もしも人間学にテストがあったら二人は20点ぐらいですね」

「「なっ!？」」

怒った表情になる二人

「ネギ先生はどうですか？」

「……復活されたらいろんな人達が困るし倒します」

「10点」

「え?」

「さあ殺す派の皆さんは点数が低いですよ、殺さない派の皆さんはどうでしょうか解説の葉加瀬さん」

「そうですね、主戦力としては桜子さんと夏美さんがいますね」

「なるほどなるほど、では村上君どうぞ」

「ふえ？」

おいおい、突然のことで処理落ち起こすなよ

「えっと、だって“皆が”悪って言うてるんですよ？　なら本当に悪かわからないじゃないですか？」

「75点！　椎名君と同点ですね」

いやー、うちの連中は良い子達だ。

「先生、お言葉ですが身内最良では？」

むむむ、ガンドルが突っかかってきたぞ。

「ははは、そうとられてしまいましたか。いいですか？　村上君の言った通り“皆が”悪の魔法使いだと言っているんです、決して自分で判断したわけじゃない」

魔法先生達が怪訝な表情で俺を見てくる。

「確かに前例があったかもしれない、本当に復活したらなにか悪さをするかもしれない」

俺は目を瞑って話す

「だから勇者である自分は“皆の意見”に従って魔法使いを殺す：英雄や正義の味方としては立派な考えですが人間としては屑です」

プチンと何かが切れた音がした。

「誰が屑なのですか!？」

ああなるへそ、そういえば“正義の味方”の方々だったなこいつらは

「勇者のあなたは直にその魔法使いを知っている、なのに自分で考えずに周りの意見で判断する：僕はそんな人間は小物中の小物だと思っています。もちろん間違いだとは言いませんが自分で判断できない人には大きなことは起こせない」

「ぬぐっ」

俺は先生達を引込めさせて続ける。

「自分の目で見て、自分で考え、自分で実行に移す。これができる人間が大物、英雄と呼ばれることが出来るための道への扉を開くことができます。時には周りの判断で行わなければならないこともあるかもしれませんが全てにおいての真実は自分なんです、自分で見て決断したものにこそ価値があり、真実があるんです」

俺はそこで今日の締め言葉を言う

「だから皆さんは、考えを柔軟にして、物事を様々な角度から考えて、やる時はしっかりとやってください。これが出世する大物の条件ですよ」

茶目っ気を出してウインクなんぞしてみたり。

「では今日はここまでにしましようか、委員長号令を」

「起立、礼！」

『ありがとうございました！』

「はい、じゃあこのままHRやりますからネギ先生よろしくお願いします」

そして今日は終わった。

明日からアメリカ：バカンスだじえい。

銃撃10（後書き）

途中から訳が分からなくなった。

あ、ちなみに次から修学旅行編に突入です

銃撃11（前書き）

遅れてごめんなさい、これからは週一になってもちゃんと投稿しよう

銃撃11

あの講習の後、俺はアメリカで講義をして帰ってきていた。

もうすぐうちは修学旅行に行くことになる。

まあそれは置いておいて、俺はこの間のことを色々と考えていた。

まずはこの俺が住んでいる場所

女子寮の管理人室

この時点で俺はもしかしたら魔法関係者と疑われていたのかもしれない。

それに加えてこの前の講習

ちよいと挑発しすぎたやもしれん

考えすぎなら良いが、まだバラすには早い

秘密裏に探りを入れながらもバレていないことを祈るだけだ。

当然、しばらく俺は一般人と同じような生活を送らねばならない。

なので魔法関連の物は大量の武器を収めている符以外はエヴァに預けている。

エヴァと真名との接触もプライベートではなるべく控えている。

しかし魔法側の情報も欲しいので真名とエヴァとは三人しか知らない暗号を会話に混ぜながら情報のやり取りを学校でしている。

出来る限り自然に、バレないように

これからしばらく挑発もせずに落ち着こう。

それと俺が守るものについてだ。

大戦中は俺以外、守るものがなかった。

でも今はどうだ？

真名が、エヴァが、学園の生徒が

ちよいと俺には抱かえきれないほどのものを持ってしまっているよ
うな気がする。

背負っているのではない、抱かえているのだ。

違いは曖昧で説明できないがはっきりと違うのだ。

守るものが多くなってしまえばそれだけ行動に自由が利かなくなる

まあ、真名とエヴァは守らなくても十分だと思うが。

学園の生徒も正義馬鹿の魔法先生と魔法生徒が守るだろうし…あれ
？ 案外守るものってない？

……なんか飲むか

「すみません」

「ん？」

俺が部屋で丁度コーヒーを飲もうか紅茶を飲もうか、はたまた緑茶にしようかと悩み始めた時お客がやってきた。

相談のようだな

「はいはい、なんでしょうかね？」

管理人室の扉を開けるとそこには真名が居た。

「なんだ、どうぞ」

「お邪魔します」

帰国最初の来訪者がお前だなんて……

ま、どうでも良いんだが。

「なにか飲む？」

「緑茶をください」

緑茶か、なんかイメージに合わないな。

俺は注文の通り、緑茶を淹れてちゃぶ台を挟み向かい合って座る。

「で、なんだよ？」

「いえ、少しばかり相談が」

「？ 相談とは珍しいな」

いつもは菓子を食べに来るか、茶を飲みに来るか、勝手に寝に来るかぐらいなのに……ふむ、明日は雨かな

「実はですね、今度の修学旅行についてなんですが」

トントントンと真名が指でちゃぶ台を叩いて音を鳴らす。

一瞬気になったものの俺は話を進める。

「へえ、なになかな？ ああ、ごめんね。ちょっと仕事しながらになるけども良いかい？」

「構いませんよ」

動揺するな、隠し通せ。

「私のことなんですけどね……最近なんだかゴキブリが酷くって」

「うわあ」

「なんだかそれが気になっちゃって部屋にもなんかいっぱい居ると思うと」

「同部屋の桜咲くんはどうなんだい？」

「彼女、案外鈍感ですからね。私でさえ偶然ですが二、三匹見つけたぐらいですから……普段の生活を見る限りは分かってませんね」

「ふむふむ、なるべく早めに対処を……一応殺虫剤貰っとく？」

「いえ、ありますから」

「それは良かった、ちゃんと片づけとかするんだよ？」

「わかってますよ」

「特に君や桜咲くんはバイトとかで夜遅くに帰ってくることもあるんだから、やるんだったら他の人に迷惑がいかないようにね」

「はい、わかりました。じゃあ私は修学旅行の準備がありますので」

「うん、じゃあね」

立ち上がり自分の部屋に戻って行く真名、俺はその姿を見送ってすぐさま自然に部屋全体へと視線を巡らす。

そうやら俺の部屋は大丈夫のようだな。

念には念を入れて部屋の片づけを始める。

「……ないな」

俺はそれを確認すると先程まで書いていた書類を見る。

そこにはメモがしてあった。

最初の指で机を叩いて音を立てるあれ

あれは俺に今から暗号を伝える仕草だ。

一つ一つ解読していこう

“私の話ですが”

これは真名のことか

“ゴキブリ”

恐らくは麻帆良の魔法関連の奴らの事だと思う

“二、三匹見つけた”

監視されてるのか

簡単な暗号だ

つまりは“麻帆良にあなたとの関係を疑われている、最近監視が付いている”

これで俺の動きは封じられたか、どうするか？

着実に、運命の修学旅行への日にちは迫って行くのである。

銃撃11（後書き）

目指せ完結！！

銃撃12（前書き）

どうも、すみませんでしたあ！！

話が浮かばなかったのとPCの不調により更新が二ヶ月もされていませんでした。

今後はこのようなことがないように気を付けます。

楽しみにしてくださっていたがた、本当に申し訳ありませんでした。

銃撃12

ああ、最悪だった。

今日まで麻帆良の魔法関連者からの監視が厳しくて窮屈だった。

でも今日からしばらくは修学旅行で監視の目はあるがそれは麻帆良中学の先生と生徒だけ

わずか数人、しかもネギが密書を預かっているのでそっちの方を重要視するはず。

ようするに言いたいことはなにかって？

それはだな

「俺は自由なんだ！」

なんて素敵なんだろう。

この解放感……いつそのこと傭兵に戻ろうかな？

「おや、私が一番乗りだと思っていたら弾視先生が一番乗りでしたか」

そんなことを考えていたら新田先生がやってきた。

「いやはや、お恥ずかしながらついつい遠足前の子供の様に寝れなかったんです」

「ははは、その少年のようなところも弾視先生のいいところですよ」
でも仕事はきちんとしてくださいねと、しっかりと釘を刺すところは流石だ。

「今回はエヴァンジェリン君も来るみたいですね」

「そうなんですよ、失礼ながら副担とは言え驚いてしまいました」
俺の事はバラしていないようだが、一体どんな風にあの狸ジジイに
言っただよ。

少なくとも今後、俺への監視の目は更に厳しくなるだろうな。

はあ、朝からテンションが下がっちゃったよ。

自業自得だから仕方がないのだけどな
とりあえずのことは既に済ませている

この監視がいつまで続くかはわからんが麻帆良祭までにはなんとか
せねば

京都にはあのサムライが居たな

大戦中には防御に徹したゼスト並みに苦労させられた相手だ

個人的には赤髪バガと筋肉達磨よりも大変だったな

いや、本当に

だって次元ごと俺の弾丸を斬るんだよ？

しかも俺の少ない魔力や気で強化した亜音速の弾丸の嵐を丸ごと飲みこむの。

……若干トラウマになりかけたのは秘密だ

しかし会いたいな

大戦中は殺し合いばっかだったし

懐かしい宿敵と一杯ってのもこれまた乙だ

「どうしたんですか？」

「あ、いえ。京都には昔の知人が居ましてね。今頃、どうしてるかと」

どうやら思った以上に懐かしさに思い耽っていたようだ。

「……………本当に懐かしいなあ」

あの不条理だらけの世界で必死に生きていた時代

大英雄として崇められ

大罪人として憎まれ

“弾”として生きてきたあの日々

戦場に乱入して問答無用で数多の戦艦を撃墜させた

当然、今でも数多くの人達から憎まれているだろう

……英雄として最後に世界から消息を絶ったお陰でかなり美化されているようだがな。

ま、恨まれてるのには変わらないか

ナギ達が各国のお偉いさんに頼んで俺を未だに賞金首にしてるぐらいだし

「お、どうやら他の先生方も来たようすな」

昔のことはともかくとして、今は教師だ

ちゃんと仕事しなきゃな

そして修学旅行は始まる

銃撃12（後書き）

さてと、次回からは京都編か

頑張らなきゃな

感想などお待ちしております。

銃撃13（前書き）

スランプです、なにも話が思いつかない。

でも短いながらも投稿させていただきました

銃撃13

「起立、気を付け、休むな！」

俺はそろったクラスの連中に号令をかける。

「先生、ほんま今日は朝からテンションが高いな」

「ふふふ、近衛よ。修学旅行なのだし少しぐらいはしゃいだってよ
かろう」

「そやね、うちらももつと盛り上がって行くで!!」

『イエーイ!!』

そんな盛り上がりを見せる中、こつちを睨んでくる人が二人

一人はエヴァ、『はやくいきたい』って目をしてる。

てか、あれって思念体じゃね？

質量のある分身、確かにこれならばあの狸ジジイも許可を出すわな。

魔力はほとんどないし、初心者用の魔法も使えない。

だけでも思念体は本体と繋がっているからこちらを本体も見れて、
尚且つ自分の意思通りに動かせる。

おそらくはエヴァの本体は家で寝てるかなにかしているだろう。

それよりも、俺にとってもう一つの視線が重要だ。

学校でもこの人を敵に回すと厄介な人物

正直言つて俺も正面からは戦いたくない相手だ。

そう、ある意味で狸ジジイや俺よりも麻帆良中“最強”な人

「弾視先生、興奮するのは良いですが自重は忘れずにお願いしますよ」

くっ、このプレッシャー

一瞬でも気を抜いたら膝をついてしまうだろう。

「すみませんでした新田先生」

俺、この人には勝てる気がしないもん。

なんでだろうか、魔力も気も使えないはずの新田先生になぜここままで俺がビビッている？

とにかくだ、今はそんなことよりやる必要があるだろう。

新幹線に乗り込み、俺はみんなを見て回る

「弾視先生、隣の席になろうよ」

「ははは、明石…こんなオジサンよりもネギ先生を捕まえたほうが良いと思うよ」

「オジサンって、まだ20前半じゃんか…それにネギ先生も良いけど、弾視先生のほうが色々相談とか乗ってくれるし」

むむむ、なぜだろうか。

俺ってば人生経験とか滅茶苦茶薄いのになぜにこうも相談される？

実は相談を受けたりするのって苦手な方だから嫌なんだよ。

「それで先生、なんとか修学旅行先の旅館で抜け出せる方法は無いすかね？」

む、なるほどそういうことか。

俺が教えるか少し悩んでいると班員の何人が俺のスーツの裾に幾ばくかの小銭をねじ込んできた。

「あとでルートを書いた地図を渡してやる（ボソッ）」

新田先生に見えないようにガッチリと握手をする俺と明石

「流石先生、話がわかるね」

「なにに、俺はただギブ&テイクをしてるだけさ」

ちゃんとこいつら、俺の授業で教えた内容（賄賂の渡し方）を覚えて実戦で使ってきやがった。

クソ、これだったら中間の前に教えとけばもっと稼げたはずだ。

「まあ、今は少しの間、昼食におかずを一品出来るだけでも儲けものか」

俺は少し幸せな気分になりながら、仕事に戻るのであった。

それからしばらくして、俺がトイレから戻ると桜咲が自動ドアのところで立っていた。

ああ……と、そうだった。

桜咲は最初の方はクラスにも馴染めてないからここにいるんだっただけか？

違うよ、親書が式神の燕さんに取られるからそれを斬るんだった。

ならば俺は隠れよう。

そして噂をすればなんとやら、件の燕が飛んできて桜咲がそれを斬り落した。

おお、流石は詠春の弟子

素晴らしい太刀筋だ。

「待て————っ!!」

少し遅れてネギもやって来た。

「……ネギ先生………」

「さ……桜咲さん？」

なんか気まずい空気になってるぞ

「あの…コレ…落とし物です…」

「え…あ———っ、コレは僕の大切な親書！ あ、ありがとうございます、桜咲さん!!！」

「それは先生の物なんですか？ 気を付けたほうが良いですね先生、特に…向こうに着いてからはね」

それではと言って自分の席に戻って行く桜咲

「ふむ、なんだあ奴」

「ははは、あんなこと言ってネギ先生は刹那が魔法関係の生徒だつて知らないのにな」

「敵と勘違いされても仕方がない言い方ですね」

「うおい、なんでお前ら三人が俺の後ろにいやがる」

いつの間にか俺の後ろにはエヴァと真名と茶々丸が居やがった。

ちなみに原作と違って、三人は桜咲と同じ班になっている。

「良いじゃないか、私はこの二人以外に話せるような相手が居ないんだ」

「友達が居ないエターナルロリータに全俺が泣いたwww」

「殺スゾ貴様」

ははは、目から光が消えているよエヴァンジェリンさん

「私はマスターの従者ですので」

健気やこの娘、エヴァにはもったいない。

「なにやら弾さんセンサーが反応したので」

ふっ、なぜだか今、真名が恐かったのはなぜ？

「わかったわかった、席に戻れお前ら。トランプでも話し相手でも、なんでもしてやるから」

「なら私の処女を奪って「とりあえず真名は黙ろうか」割と本気で言ってるんですけどね」

黙っとけや真名

余談ではあるが俺が三人とザジと桜咲（強制参加させた）でUNOをしていたらクラスの他の連中も来てUNO大会が始まり桜子と俺は食券を大量に稼いだ。

しかし俺は新田先生から怒られてしまったのは言うまでもない。

銃撃13（後書き）

なにか、ネタをください。

銃撃14（前書き）

修学旅行編、うまく書けるか不安だぜ。

銃撃14

「————まもなく京都です」

「ふっ、ようやく来たな。さあ茶々丸よ、出陣だ!!」

「落ち着いてくださいマスター」

テンションが高いぞエヴァよ

かくいう俺も実はちょっぴり興奮している。

原作のことは置いておいて、詠春に会いに行きたいと思ってるし

あの頃みたいに殺し合うのではなくて、あの時代を必死に生き抜いてきた戦友として酒でも飲んで語り合いたいものだ。

でも一度、石化されちゃうんだっただけか？

人形殿……フェイトとも最終決戦の時以外に話したこともないし、話したと言っても一言二言だけだ。

話してみるのもまた一興

造物主が死んだとも到底思えないし、そこら辺の事情も聞いてみたい。

「ネギ君、弾視先生、ホラ着くよ着くよ————」

「あ、ハイッ、すみません！」

「ん？　おお、すまんね」

俺と同じくネギもなにやら考えていたようだ。

あれだな、ファザコンだから親父の手掛かりがあると思って燃えてたんだな。

それとも桜咲の件に関してか？

安心しな、それならすぐにわかることになるさ。

「では皆さん、いざ京都へ！！」

『お————！！』

そして舞台は清水寺

「ここが清水の寺か」

「あれ、弾視先生って京都初めてなんですか？」

話しかけてきたのは朝倉

「ははは、そうなんだよ」

「へえ、修学旅行でも来たことないんですか？」

「ないね」

俺の横に立って景色を眺める朝倉

向こうでは綾瀬が神社仏閣仏像マニアとしての力量を発揮している。

「そっか、じゃあ先生私が案内をしてあげるよ!!」

そう言って俺の手を掴んで引っ張り出す朝倉

「じゃあ頼むとしようか」

「任せておいて!!」

なんとも嬉しそうな笑顔ですね。

朝倉side

なんとか弾視先生に話しかけられたわ。

しかもあろうことか案内まで

手も握っちゃたし、修学旅行初日から幸先良いわね。

ちゃんと下調べもしてある。

弾視先生は旅館で一人部屋

このまま夜の旅館で先生の部屋に忍び込んで……

でもその前にデカイ障害が二つもあるわ。

さっきからキツイ視線を向けてくるエヴァちゃんとタツミ

あの二人をどうにかしないといけないわね。

「ん？　なんだこの匂いは？」

先生が急に匂いが変だと言い出した。

え、私ちゃんと体とか洗ったのに！？

「これは……酒の匂い」

「お酒？」

なんだ、なら私じゃ――――

「あわわ、なんでもないですよ瀬流彦先生、新田先生！！」

すると目の前でなんだか慌ててるネギ君がいた。

「……………なるほどな、単なるイタズラか」

それを見た先生は全てを悟った顔をした。

ヤバいわね、すごく凛々しい横顔だわ。

「朝倉、ちよいと手伝ってくれ」

「ふえ？ あ、はい！！」

思わず惚けていたわ。

「新田先生、どうやら一部の生徒が疲れて寝てしまったようなので予定を切り上げて旅館に向かいませんか？」

「そうですか、なんとも変な場所で急に眠ってしまうものだ」

この後、旅館に行くだけだったから良いけどなんでみんなここで寝てるのかしら？

「じゃあ朝倉は鳴滝姉妹を運んでくれ」

私はおかしく思いながらもバスへとみんなを運んでいくのであった。

その日の夕方、風呂を上がった私は弾視先生の部屋に呼び出された。

「まあ、座って」

言われた通り、私は先生の正面にある座布団の上に座った。

「ほら、俺の奢りだよ。好きな物を飲みなさい、もちろん酒以外ね」

職員用の部屋には冷蔵庫があって、飲み物が色々あった。

リンゴの缶ジュースを取り出して私は先生に呼び出された訳を聞く

「今日の清水寺の件だが、朝倉はなんでみんなが急に、あんなところで寝たのか気になったって顔をしてるね」

ちよつと、ちよつとだけど昼間に想像したことが現実になると思った自分が居たことは内緒だ。

「あれはね、音羽の滝の上に酒が出てくるようにイタズラされていたらなんだ」

イタズラ……話題性にかけてるから記事には出来ないわね。

「ははは、残念だったね。生憎と記事にできるような真相じゃなくて」

「本当ですよ、お詫びに先生と添い寝させてください」

「とても魅力的なお詫びのさせかただけどそれは無理だな」

肩を竦めてやんわりと断る先生

む、これまた残念

「まあ言いたかったのはこれだけだよ」

「それだけなんですか？」

「まあ……うん。朝倉ってこういう事件があったら記事にして真相を探ろうとするだろう？　そこからもしも他の先生達にバレたらクラスの皆が停学になっちゃうかもしれないしね」

ああ、確かにそうかもしれないわね。

私はガツクリと肩を落とす

「ま、スクープなんて浅倉が一流の記者なら幾らでも出会えるさ。それこそこの修学旅行でもな」

苦笑いしながら弾視先生が頭を撫でてくる

「…………ふぁ／＼／」

ヤバイ、これはヤバイわ

なにこれ、気持ち良すぎでしょ

むう、もっと撫でられたいよお

しかし望みは儚く先生は離れてしまった

「さ、そろそろ飯の時間だ。一緒に食堂に行こうか」

「はーい」

ふふふ、まだまだチャンスはあるんだしまたこんな事をしてもらうわよ

焦ることはない、しっかり着実に掴んでやるわ

S i d e o u t

「ふう」

俺は露天風呂に浸かりながら、のんびりと空を見上げている

「あつ、弾視先生じゃないですか」

声がしたので振り返るとネギが居た

「ああ、ネギ先生ですか」

そうだった、こいつも教員だったな

「待ちなさい、君はなんで風呂に入ろうとしてるんだ」

風呂に入ろうとしているネギに俺は問い掛けた

「え？　だって露天風呂なんだし――」

そうだ、ここは風呂だからお湯に浸かるのは当たり前なのだが

俺は風呂から上がってネギを掴む

「風呂に浸かる前には身体を洗い流しなさい」

「じ、実は僕ってそういうのが苦手で」

「知りません。そうだ、せっかくだから背中を洗ってあげよう。男
どうし、裸の付き合いもこういう時には必要だ」

「男どうしですか？」

「そ、男どうしだよ」

桶に湯を溜めてネギの頭から掛けて言ってやる

しばらくしてネギとついでにオコジヨを洗ってやり、二人と一匹で湯船に浸かる

「どうだい？ 生徒達とは上手くいってるかな？」

「弾視先生みたいに皆さんから頼られてはいないですけど仲良くは出来てると思います」

そうかそうか、流石は天才だな

「あ、あのですね、聞いても良いですか？」

「なんだい？」

「その身体にある傷って……」

ああ、なるほどね

俺の身体は戦時中に刻まれた傷が沢山ある

「昔、ヤンチャしてたって話は自己紹介の時にしたかな」

「はい、でも今はやってないって」

うむうむ、ちゃんと聞いていたな

「実は昔、俺は戦場に居たんだ」

ゴクリと息を飲む音がした

「戦場を駆け抜け、迫り来る死の閃光を掻い潜り、多くの人を殺した」

何百という戦艦も沈めたしな

「自分が生き抜くために泥水をすすり、敵を喰らい、血にまみれた」

潜伏系の長丁場になる仕事ではガチで泥水をすすったし

まだ自分の戦い方が見つからなかった時や戦いに慣れておらず猛者達に迫られた時には敵の喉元を食い千切ったこともある

血にまみれるなんて戦争を生き抜いたならば当たり前のことだ

「でも最終決戦の時に俺はとあることがあってね、戦争からは退くことにした。それからしばらくして外国で教員免許を取って人間学を教えていたら明石教授にこの学園にスカウトされたんだ」

嘘はなにも言っていない

全部本当のことだ

「そ、そんな過去があったんですか」

多少は予想してたのか思ったよりも反応が薄いな

「まあ、辛気くさい話はやめて。ネギ先生もお年頃なんだし気になる生徒はいないの？　もちろん女の子として」

「いいい、居ませんよ／＼／＼」

あらら、恥ずかしがっちゃって

必死に笑いを堪えていたら入口の方から音がした

「ん？　ほう、これはなかなか……」

入ってきたのは桜咲

最近の中学生の発育の良さに驚いた

「困ったな…魔法使いであるネギ先生なら何とかしてくれると思っただが……」

魔法使いねえ、所詮今の魔法使いなんて正義バカしか居ねえよ。

「それに弾視先生も、あの雰囲気からして歴戦の猛者だろうし、一般人とはいえ期待しても良いものか」

俺がか？　とりあえずは傍観を決めておくよ、今のところはね。

しかしなんで桜咲が……確か外には教員使用の時間帯の掛札があったぞ？

チラリとネギを見ると、自分がなぜ魔法使いかバレているのか気に

なっているらしく、いつの間にか手には魔法の杖を握っていた。

「誰だっ!？」

無意識に出したネギの殺気に反応した桜咲が何故か風呂にまで持ってきていた刀で岩を斬り、その後ろに居たネギのアホ毛まで斬った。

「風花・武装解除」

桜咲の刀を弾いたが詰めが甘いな。

刀を弾き飛ばしたが桜咲はそのまま浴槽に飛びこみネギを岩に押し付け首を右手で握り左手でネギの息子を掴んだ

「何者だ、答えねばひねり潰すぞ」

うわあ、そんな殺生な

「やあ、桜咲君。見事な動きだったけど止めてあげて」

流石にひねり潰されるのは可愛そうなので声を掛けた

「ネギ先生!？ あ、それに弾視先生まで!？」

ことを理解したのか、あわあわとし始めた

「とりあえずは裸見えてるよ」

「~~~~~／／／」

顔を真っ赤にして湯船に入る桜咲

「こ、これはですね、その／＼／」

なんか可愛いな

俺が恥ずかしがる桜咲に若干だが萌えていたらネギが怪訝そうな顔で見てきた

「桜咲さん、あなたはやはり関西呪術協会の人なんですか？」

おいおい、一応俺はお前らには一般人ってことにしてるんだから少しは魔法関係の話は自重せいや

「違います、私は「キヤアアアアアア」ッ！！」

桜咲も俺の前だと言うのに話を続けようとするな

それよりもなんだよ今の悲鳴

「15番、桜咲刹那、一応先生の味方です」

「へ？」

僕って空気？

そんなことを思った俺だった

銃撃14（後書き）

次回、人形殿との邂逅です。

銃撃15（前書き）

主人公ですが、修学旅行編では間接的にしか原作には関わりません

裏方ですが、原作には多少の影響を及ぼすかも……

銃撃15

「ひゃああゝっ！」

なんか脱衣所から悲鳴が聞こえた。

「まさか奴ら、このかお嬢様に手を出すつもりか！」

「え……？ お嬢様？」

なんか桜咲とかが騒いでるけど気にせずに俺は湯船に浸かって極楽気分になる。

やべえ、マジで気持ちいい。

「このかお嬢様に何をするかゝっ！！」

うわあ！？ なんか半端ない殺気が脱衣所から放たれてまっせ！？

ビックリしてそちらを見てみると小猿達に連れ去られようとしている近衛がいた。

なにがどうしてそうなった？

あ、関西呪術教会とやらの仕業でしたね。

「お嬢様！！」

刀を構えながら勢いよく脱衣所から飛び出してきた桜咲

「京都神鳴流奥義、百烈桜華斬!!」

無数の太刀筋が小猿たちを切り刻み、紙へと戻していく。

昔の詠春ほどではないが、やはり桜咲は太刀筋が良いな。

……そうだな、明日にでも詠春に会いに行くか。

なんだか桜咲が顔を真っ赤にして走り去り、近衛が昔話を良い感じの雰囲気話で話し出したので俺は風呂からあがり、気づかれないように外に出た。

詠春と会う前に奴と会わなきゃならんのでね。

「待て————っ!!」

俺が旅館の外に出て行ったネギを遠くから隠れて尾行していたらサルの着ぐるみをした女が近衛を拉致していった。

「（エヴァ、お前ってば完全に空気だけでも何してるの?）」

ふと、突然気になったので念話で話しかける

「（おお、弾か。なに、ちょっと夜の京都巡りにな）」

こいつ、完全に京都旅行を楽しみに来てるだけじゃないか。

「（今日は許すが、あまり遅くなるなよ）」

「（わかってるさ、日の出までには戻る）」

俺の話を聞いてた？

まあ良いか、エヴァだし。

てなわけで俺は近衛を追う桜咲、神楽坂、ネギの三人を見送ってから目的の方へと向かう。

屋根から屋根へと飛び移り、着いた場所とはあるビルの上

下では丁度、同じくらいにやってきたネギ達が居た。

「よお、人形殿。今夜は月が綺麗だな」

「…………君は誰だい？」

そして俺の目の前にはフェイト、なんかチビになってんな。

「約十年ぶりで、二度目の邂逅だから仕方がないとはいえ悲しいな。君の主と死闘を繰り広げたって言うのに」

「まさか、君は『狙撃種』かい？」

「御名答」

ニヤリと笑う俺

「驚いたね、全然成長してないし、こんなところで大物に出会えるとは」

「俺も驚いたね、まさか人形殿がこんなに小さくなっていたとは思わなかった」

「その言い方だと僕がここに居るのは予想できてたとも言えるのかい？」

「そうだ、とある筋があつてな。そんなことよりもだ」

俺は広域指導用で使う得物、トンファーを構える

「下の少年……は別にどうでも良いが少女たちは俺の生徒なんadena。手を出すつもりならば殺すぞ？」

「へえ、君が教師ね……じゃあ止めてみなy」

「死ね」

全部言い切る前に俺はトンファーでフェイトの右頬を殴り飛ばした。

幾層もの強固な障壁があつたが全部破壊してやったぜ。

「くっ、銃でならともかく結界を壊して僕を殴ったのは君が初めてだよ」

そうか、でもその障壁ってあと数日後にネギにも破られるぜ。

「貴様が今、手を出すのならば本気ではないとはいえ俺は貴様と戦うぞ。互いに本気ではないとはいえ、ただでは済まないのは明白だが」

「……………ならば観戦でもしておくよ」

どうやら本気らしく、完全に戦意を感じず、殺気も出してはいない。

「ふむ、ならば」

俺は警戒をしつつもフェイトの横へと並び、ともに下で繰り広げられている戦いを見守る

「まったく、君やジャック・ラカンみたいに化け物とは戦いたくはないよ」

「ふざけんな、あんな筋肉達磨なんかと一緒にするな」

まことに遺憾です。

「対して変わらないよ、どっちもチートだし」

「舐めんな、やつに戦闘で負けたことは無え」

「認めてるじゃないか、むしろジャック・ラカンよりも化け物ってなにさ」

やるなこいつ、誘導尋問か

「それはともかくとして、君は下のあいっらどう見る？」

「俺の視点からか？」

下を見下ろしてみると、桜咲は二刀流の神明流剣士と斬り合い

神楽坂はサルに脱がされかけており

ネギは近衛を盾にされ、馬鹿にされている。

「甘ちゃんしか居ないし、もしも成績を付けるなら良くて百点満点中の十五点ぐらいだろう」

「ふむ、そうかい」

同じような感想だったのか、フェイトも頷く

「まずは桜咲、あいつは太刀筋は良いがまだまだ鋭さ……違うな、全体的にかなり低い」

フェイトが相手だったとしたら、まず一太刀も浴びせられないだろうな。

「ネギは甘い、優しいのではなく甘いんだ」

優しさは大事かもしれんが甘さは捨てなければならない。

でなければ大切な判断を誤ることになるやもしれんしな。

「最後だが、あの神楽坂ってもしや——」

「可能性としては僕も考えているよ、でも確証は得てないんだ」

まさか、黄昏の姫巫女がこんなところに居る訳がなからうて。

俺の勘も鈍ったか。

「おっ、なんか三人が良い感じでメガネの娘にコンボ決めたな」

今回はこちらの勝ちか

「では僕はこれで」

「おう、じゃあな。造物主に酒の約束は忘れてないだろうなと伝えてくれ」

「了解」

そう言ってフェイトは転移魔法でどっかに行ってしまった。

はあ、俺も戻るか。

銃撃15（後書き）

さあ、感想を待ちますか。

銃撃16（前書き）

なんとか一週間以内に更新ができたな

銃撃16

「はい、今日は二日目です。朝食の前にネギ先生、なにか一発ギャグを!!」

「ええ!? 弾視先生、朝から無茶振りしないでくださいよ!!」

「では夕食時に」

『おお、これは楽しみだ!』

「みなさんもその気にならないでください!!」

必至に抗議してくるネギ

てかうちのクラスのシンクロ率には驚きを隠せないな。

「おい、なんか昨日あったのか?」

俺が朝食を食べているとエヴァと茶々丸がお盆を持って、俺のところにやってきた。

「ん? どうしたんだよいきなり」

エヴァが指で向こうを指す

見てみると近衛が桜咲のことを追いかけていた。

「ああ、昨日の晩に近衛が関西呪術教会の奴に誘拐されそうになつてな」

俺が事の経緯を話す

「その後に近衛が桜咲に嫌われていたという誤解が解けたんだろう」

「で、それなら今まで距離を置いてたし仲良くなろうとしているわけか」

まったく、桜咲は堅物なのだ。

別に羽の事などあいつらが気にする訳などないだろうに。

一族の掟かなにかは知らんが、あいつは確か追放されたんじゃないかだったか？

ならば掟も糞もないだろうに。

「しかし、お前観光から帰ってきてたんだな」

「ああ、流石に居なかったら色々と面倒くさいだろう？」

「そうだな、主に俺達教師陣が」

もしも居なかったら一日中搜索しないといけない上に、面倒くさいお説教までしなきゃいけない。

だがコイツが自主的に帰って来たとは思えない、絶対に茶々丸が無理やり連れ帰って来たのに決まっている。

「茶々丸、苦勞したな」

「いえ、いつものことです」

茶々丸、良い子や

「俺は今日、詠春のところに行ってくる」

「ほお」

なぜか興味深気になっているエヴァ

「ちなみについて来ようとかするなよ、別に戦いに行くわけじゃないし」

「わかってるさ、懐かしい顔を見に行くのだろう」

「ああ、ちよいと酒を交わしにな」

そのために麻帆良から特上の酒を持ってきたんだ。

新田先生には事情を説明したら許可が出てな、本当に嬉しい限りだ

「では少し早いが行ってくる」

「うむ」

「行ってらっしゃいませ」

俺は食事を片づけて歩き出した。

関西呪術教会総本山

そこへと続く階段を俺は登って行く。

「…………見られてるな」

数はだいたい十八ぐらいか

雰囲気からしてなかなかの手練れだが……弱いな

これならまだ桜咲のほうが強い

監視されながらも歩いているとようやく門が見え、その前には武装した巫女さんたちが居た。

「あなたは何者ですか？」

戦闘に居た武装巫女が話しかけてくるが俺は無視して思い切り叫んだ

「おおおおおい！ 詠春出てこい、狙撃種がきたぞおおおおおおお
おお！！」

ふう、スッキリした。

監視してるやつも含めて俺の行動に呆気を取られているようだ。

「まったく、本当にあなたなんですか」

奥から出てきたのは詠春

「よお、しばらく見ないうちに老けたな」

「あれから何年経ったと思ってるんですか？」

俺はそれもそうかと笑いながら詠春に案内されて奥の部屋へと行く

「本当に久しぶりですね、懐かしいですよ」

「まったくだ」

約二十年前、あの戦争の終焉

あの魔法使いと闘った時以来だからな。

「まあ、あなたが死んだとは思っておりませんでしたかね」

「いつそ死んだと思ってくれた方がどんだけ楽だったか、賞金首にしたままにしゃがって」

「あなたが戦争で挙げた戦果を考えれば当たり前ですよ。私達よりも多くの人達に恨まれているでしょう？」

「それもそうだな」

真名あたりはきつと俺が誰にも恨まれず、英雄として崇められてる
とか思ってるだろう。

それは確かに銃使い達にはそうかもしれないが、戦艦とかを容赦なく沈没させてきた俺がそんなことあるはずがあるまい。

「当時、あの戦争時代であなたは制空権を独占してました」

「ははは、魔法で空も飛べないのに空中戦が一番得意だからな」

俺もあの頃よりは成長して、少ない魔力で一瞬だが空中に足場を作ることができるようになった。

「ところで、あの最後のあれからなにがあったんですか？」

「ん？ あの後か……実はな詠春、俺ってば ■ ■ になったんだ」

俺がそういうと詠春は顔を驚愕させた。

「ど、どういうことですか」

「あの時、莫大かつ濃密な魔力の渦にのみこまれた。その中で俺の細胞は魔力によって破壊され、魔力によって再構築が行なわれた」

その結果が ■ ■ だ。

「とうとう『狙撃種』は人の領域を超えたのですか」

「九割方はな」

カカカと俺は声を上げて笑う。

詠春はかなり呆れた表情をしている。

「そうだ、明日にはナギの息子のネギ・スプリングフィールドとそのお仲間達にお前の娘がここに来るぞ」

「ほう、なぜあなたが私の娘のことを知っているのですか？」

「そう殺気立つな。今、俺は麻帆良で人間学の教師をやっていて昨日から三年生は修学旅行なんだ」

「それは知っていますよ」

「そんなでもって、ネギが学園長から西と東の同盟の親書を渡す任務をネギにした」

あの妖怪ジジイのことだから他にもなにかやってるかもしれないがな。

「お義父様が……」

「それでだ、昨日お前の娘は関西呪術教会の連中に誘拐されそうになった」

「なんですって!？」

「落ち着けよ、今回はネギとアスナと桜咲が近衛木乃香を守ったがその時にフェイトのやつと出会った」

何度も驚いている詠春だが今回ばかりは声も出ないようだ

「俺の勘と憶測だが今回の件、ネギの腕ためしが目的であって“完全なる世界”がなにかをするとは思えん」

「……なるほど、わかりました」

覚悟を決めたか

さてと、そろそろ本題に入るか

「実はよ詠春、夏に――」

サプライズはデカイ方が盛り上がるよな。

銃撃16（後書き）

次はどんな話にすればいい？

銃撃17（前書き）

スランプだ、話が浮かばないorz

銃撃17

日も暮れ始め、俺は旅館に戻ってきて風呂に入ろうと浴場に行ったらタオルを一枚だけ纏った朝倉とネギ君が見つめ合っていて、制服を着た雪広と朝倉と佐々木と神楽坂が居た。

「…………これが噂のハーレムというやつか」

十歳のクセにやるな。

俺ですらハーレムは形成したことがないぞ。

てかこの人数を相手にするとかw

「え？」

「ん？」

『あ』

俺の存在に気が付いたネギ先生がこちらを見てきて、朝倉が振り返り、他の四人もそれにつられて俺を見た。

俺の格好はネギと違って下半身をタオルで隠しているだけ。

ネギの場合は全裸だ。

「…………すみません、お邪魔でしたね」

『ちよおおおおおと、待ってえええええええええええええええええ！？』

去ろうとする俺は捕まり、一時間も誤解を解くために話をされ続けたのは当たり前といえば当たり前であった。

「だから先生、さっきのは取材の一環であって変な意味はないからね！！」

「分かっているよ、だからそろそろ上がったらどうだい？」

誤解を解くためとかいう理由でなぜか一緒に風呂に入り、酌をしてくれている朝倉

「駄目だよ、絶対に先生まだわかってないでしょ！？」

「いいや、もうわかってるから」

俺が教員で最後だから良いものの、他の先生が入ってきたらどうするつもりだ。

そんなことを考えていたら、後ろからカコンと多分だけど桶が落ちる音がした。

なんだと思って振り返ってみると、全裸の真名が居た。

そしてまた理由は分からないが凄い殺気だ。

「朝倉、貴様は彈視先生となにをやっている？」

「なにして、見て分らない？ 酌をしてあげてるの」

おお、なんだこのポジション

真名と朝倉の間に挟まれて、半端じゃないプレッシャーが……

「ふむ、では私も酌をしてあげるか」

そう言って真名が朝倉と反対側の俺の隣に来る。

二人とも、高校生とは思えぬほどに美人だし発育も良い

正直言って、息子もスタンディングオベーションしそうなほどだ。

必至に理性で抑えているから良いものの、このままいけば二人を襲ってしまふかもしれない。

だから俺は急いで逃げようとしたのだが

「どこへ行くんですか？」

ガシッと掴まれて逃げれない。

「なあ朝倉、これは先生が逃げないように捕まえておくべきではないか？」

「そうだね、せっかく生徒が酌をしてあげようとしているのに逃げ

るだなんて酷いもんね」

俺の腕を胸に挟み込み、逃げられないようにしてくる。

ちょ、お前等w

「これは流石に（社会的にも理性的にも）マズイって二人とも」

「「……………（シラーン）」」

仲良いな、お前等!!

この後、俺はしばらく二人に酌をされ、理性をすり減らし続けた。

……………15禁シーンは見せないぜ？

そんなことがあったのだが、今は見回りの時間

俺は瀬流彦先生とネギ先生と一緒にようだ。

「ははは、騒がしいですね我が3－Aは」

「あう」

うん、ネギの気持ちはわかるよ

絶対にこの後で新田先生に『あまり、3－Aの生徒を甘やかさないように』とか言われそうだな。

「御愁傷さまだね、二人とも」

瀬流彦にポンポンと背中を叩かれる

ちなみに俺と瀬流彦は結構、仲が良い

年齢が近い（俺の実年齢はもっと上だが）ために話が合い、良く飲みに行く。

人間として信用ができるし、正義バカという訳でもない。

非常に柔軟性のある頭で、自分の考えを持っている、今どき珍しい人間だ。

「それなら瀬流彦さ、俺らの代わりに怒られてよ」

「嫌だよ、ガンドルフィーニ先生だけで僕は十分だよ」

ああ、こいつも苦労人だったな、そう言えば。

「ネギ先生も今度一緒に飲みに行く？」

「え？　僕はまだ未成年ですよ？」

「なにを言っているんだい？　まだ若いんだから、少しばかりそういう悪いことも経験しなきゃいかんぞ」

正義バカは大嫌いだ、こいつもその傾向があるから案外嫌いだ。

だから今のうちに完全な正義バカにならないように教育しなきゃ。

……俺って良い人！！

「ゴホンッ」

俺と瀬流彦は後ろからした咳払いに首をギギギ、と動かして振り向くと

「二人とも、仰ることはもったもですが、そういうのはネギ先生がもう少し年齢が上がったらにしてください」

「サー、イエス、サー！！」

それはそれは、綺麗な敬礼だったそうなの。

「ネギ先生、時間も遅いですしそろそろ寝てください」

「でも、仕事が――――」

「確かにあなたは先生という立場ですが、それ以前に10歳の少年なんですから寝なさい」

ここからは大人の時間ですよ、そう言ってネギを部屋に帰らせる新田先生

「……優しいですね」

「当然のことをしたまですよ。さあ、私達はお仕事です、騒がしい3-Aのところまで行きましょうか」

その言葉に俺は苦笑いしながら新田先生の後ろについて行く

うし、頑張るか。

??? side

『修学旅行特別企画！ ネギ先生と修学旅行でイチャラブキッス大作戦〜！』

ついに始まったクラス企画

今回の戦いには真名、エヴァ、朝倉の三人は当初、なんらかの形でどさくさに紛れて弾を狙っていたのだが協定によりイベントには不参加

抜け駆けが限りなく難しくなってしまった。

「ふふふ、甘いアルネ。これは私達が圧倒的に有利になったね！」

「うむ、重畳でござる」

それをとある筋から知った二人が笑う。

「今まではあの三人に気づかれないように水面下で活動していたが、とうとう行動に移せるでござるな」

「分かっていると思うが——」

「うむ、協力はするが最初に唇を頂くのは早い者勝ちでござる」

乙女達の闘いは密かに激しさを増していくのであった。

銃撃17（後書き）

次回、『唇争奪戦〜乙女達の戦い〜』です

……多分

銃撃18（前書き）

この前は間違えた作品を投稿してしまい申し訳ありませんでした。

これからはあのようなことが無いように気を付けます。

誠に、申し訳ありませんでした。

銃撃18

俺が見回りをしているとさっそく異変を見つけた。

「…………はやくも二人捕まったのか」

長谷川と明石がロビーで正座していた。

「ふええん、助けてよ弾視先生」

「すまん明石、俺も新田先生に怒られたくはない」

見捨てる形になるがこれも人生の経験の一つとしてくれ。

「しかし、長谷川が捕まるとはねえ」

「私だって予想外だよ、こんなハマするつもりはなかったし」

「ははは、それは残念だったな」

では、この二人が捕まったということはそろそろネギの分身のところに宮崎たちが行ったところか。

俺は振り返り、ネギの部屋を目指そうとしたら

「殺気っ!?!」

咄嗟に前に転がり飛来した枕を避ける。

そのままの勢いを利用してソファの陰に隠れる。

物陰からシャーペンを投げ出してみると枕がそれを撃ち貫く。

「狙撃……この腕だと真名か」

バカな、先程の確認では真名は不参加だったはず。

そしてまた咄嗟に体を滑らせて仰向けになる。

すると一瞬前まで隠れていたソファが見えないほどの薄い糸でグルグル巻きにされていた。

もしも判断が遅れていたら俺は拘束されていただろう。

この糸からはほんの微量だが魔力を感じる。

——エヴァか！

『ふはは！ 朝倉め、まだまだ甘いな。我々が大人しく黙っている
とでも思ったか！！』

どこからか声が聴こえてくる

くっ、これはまずい

ここから直ぐに退却したいが真名の枕狙撃により退却できない——
いや、枕ごとき当たってもどうということは無いが——どうする俺？

「ここは敢えて逃げるぜ！」

全速力で走りだす

マシンガンのように枕が俺を狙ってくるが、その弾幕を潜り抜け曲がり角を曲がる。

どうやら俺も安心はしていられなくなったようだな。

S i d e o u t

朝倉s i d e

「一杯喰わされたと言う訳ね」

齒を食いしばり私は悔しさのあまり机を拳で叩いた

策士、策に溺れるとはまさにこのことね。

ふふふ、良い度胸じゃない。

「姉さん、いったいどうしたんだい？」

「ちょっと黙ってて」

考えろ、考えるんだ、最善の手を尽くし、あの二人を退けなければ！

「良いでしょう、我が智謀をお見せしよう」

先手は見事に打たれたけども、そうそう甘くはないわよ。

s
i
d
e

o
u
t

銃撃18（後書き）

短い、話がいつかん。

メインヒロインも誰か考えてない。

これから難産が続くだろうな。

銃撃19（前書き）

一月一回更新になってしまっている上にあまりにも文字数がすくなくてすみません!!

実はこの修学旅行編が自分的に難産過ぎて詰まっております。

そこですけども、みなさんに一つ質問です

この修学旅行編で、学園側に主人公の正体をバラすかバラさないほうが良いか

どちらが良いか希望したいと思っております。

では、短いですが本編へどうぞ

銃撃19

「……大戦の頃を思い出すねえ」

狙撃種とまで言われた俺が狙撃される側に回るとは

まったく、こんなこといつ以来だ？

少なくとも、戦場で紅い翼を相手にする頃よりも以前。

俺が惨めに必死こいて生き残ろうとしていた頃ぐらい以来か

「しかも相手は俺の戦い方を真似ている真名に真祖の吸血鬼であるエヴァ、俺が万全でもあまり戦いたくない組み合わせだな」

特にエヴァ、あいつに至ってはどうしようもない。

俺が戦う上で恐らくは最も戦いたくない相手だ。

情とか抜きで、正直言ってあいつと闘うなら紅い翼の面々と正面から戦いに行く方がマシだ

あいつの痕は“常に移動している”

しかも瞬間移動みたいにパッと消えてパッと現れる。

幾つかパターン化されてはいるようだが未だにそのパターンが読めない。

もしも初見で戦うなら確実に大規模魔法とかで殺される。

「これでもあいつと同じ“最強種”とか言われてるけど、やっぱり所詮俺は人間だな」

別に悔しくはない。

むしろこういうところで人間だと実感することができるのが嬉しい。

「そうだぞ、だから私の眷属となれ」

「ギャ—————！」

で、出た！

俺が廊下を走りながら呟いたら後ろから声がして振り返ったら手を伸ばしながら迫ってくるエヴァが居た。

これは恐いよ！

「ははは、さっさと捕まれ！！」

くおお、速いぞこいつ。

いかんな、このままでは追いつかれる。

「させないアルよ！」

「なんだとっ！？」

俺までもう少し、本当にあとちよつとのところでエヴァが突然現れた謎の物体によって吹き飛んだ。

「ほう、まさかお前が来るとはな——古！」

エヴァを吹き飛ばした物体の正体、それは古だった。

「助けに来たヨ、先生！！」

ビシツと構える古

おお、
なんで助けてくれたか知らんがカツコイイぞ

これはマジで惚れちゃうかも
W
W
W

「先生、ここは任せて先に行くネ」

「すまん、任せた!!」

俺が身を翻して走り出すと同時に背後から打撃音がし始めた

……これってネギの唇を争奪するための枕投げじゃないかったけ？

朝倉
side

「……固まったようね」

古と楓が参戦してきたことは完全に予想外だったけども、ターゲットが一か所に固まってくれたのが幸いね。

情報操作はもうしたし、新田先生が既に向かってる

ただ懸念すべきは新田先生とターゲット達との距離が離れていること。

少し、誘導してみますかね。

s i d e o u t

銃撃19（後書き）

……そういやアリナの方も書かなきゃな。

あっちは非転生物だし、全然系統が違くなりそうだ。

銃撃20（前書き）

どうも、お久しぶりです。

今回はようやく唇争奪戦が終わります

書いていて何回もグダグダになってしまったので最終的にはもう、拍子抜けするぐらい短く、なおかつ伏線とかも気にせずに終わらせました。

文句もあると思いますが、お許しください

銃撃20

戦いはヒートアップしていた。

忍術を駆使して敵を翻弄する楓

体術を使って敵の猛攻を捌く古

どこから出したか分からないがハンドガンのエアガンで敵を撃ち貫く真名

吸血鬼の身体能力と数百年以上に及ぶ実戦経験で場の流れを制していくエヴァ

いつの間にか四人は協力関係のことも忘れて四つどもえの戦いになっていた。

そしてそれは膠着状態に陥っていたのだった。

だが、そんな戦いもすぐに終戦を迎えたのであった

「貴様らあああ」

低く唸るような声、四人はギチギチと首をギコチなく回して振り返る

「就寝時間はすぎておろうにいいいいいいいい！！！！」

「「「「ギアアアアアアアアア！！！！」」」」

そう、そこには麻帆良最強と名高い広域指導員の新田先生がいたのだ
まるでターミネーターのような威圧感

その額にはこぶがあり、右手には力無くダラリとしているネギの頭を鷲掴みにして引き摺っていた。

四人から見ればまさに阿修羅のように見えただろう。

「全員正座だ ああああああああああああああああああああああ
あああああああああああ！」

こうして、3-Aのオリエンテーションは終了した。

しかし――

「……危ないところだった」

何故かは知らんが新田先生が急に現れて四人を確保

これで無事に全てが終わった

「甘いわね」

「なっ!？」

ドンッ！

鈍い衝撃が後頭部を襲う

俺はそのまま気絶してしまった

朝倉side

私は気絶させた弾視先生を空き部屋に持ってきた

重たくて引きずって来ちゃったけど大丈夫だよな？

反省をしつつ私は布団の上に弾視先生を乗せて、服を脱がせる。

「ふふふ、とりあえず既成事実を作ってしまえば……」

残念だったわね、みんな

私が誘導して新田先生をあの三人の場所に向かわせ、弾視先生が油断しているところで私が気絶させて用意しておいた空き部屋に連れ込み既成事実を作る

色々賭けの部分も多かったけども、このままいけば成功ね。

「ふ、ふははははは！ これで私の勝ちよ！！」

「なにが勝ちなのだ、朝倉？」

声を聴いた瞬間、私の時間が止まった

ギチギチときこちなく首を動かして後ろを向くとそこには鬼の形相の新田先生が居たのだ。

「彈視先生の後頭部を電話帳で殴りつけて気絶させ、空き部屋に連れ込んだと思ったら貴様は」

「ち、違うこれは————」

「言い訳など聞かん！ 今回の一件の首謀者も貴様だと判明しているのだ、正座しろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「ごめんなさああああああああああい！！」

かくして、今度こそ幕が閉じたのであった。

銃撃20（後書き）

次回の話を考えなきゃ

感想をお待ちしております

銃撃21（前書き）

ああ、また一月ぶりになってしまったorz

銃撃21

昨日は本当にひどい目にあった。

朝食を食べながらそうしみじみと思う

「頭がまだ痛いぜ」

この俺が気配すら読めなかったとは不覚すぎる

朝、目が覚めてエヴァにそう言ったら爆笑されたし

「あ、おはようございます。弾視先生」

「ああ……おはようございます、ネギ先生」

こいつも昨日の被害者的な立場だったな、正座させられてたけども。

「今日はどう過ごされるのですか？」

「僕は、明日奈さんたちと一緒に行動しようと思っています」

またどうせ魔法関係のことだろう。

「そうですか」

「弾視先生はどうされるおつもりですか？」

「そうですねえ……」

今日は暇だし……そうだ、詠春に会いに行こう

いや、やっぱりやめた。

なんか今日はいいや。

「普通に観光でもしてますよ」

魔法教師からの監視の目も厳しくなってきたし、ここで特に大きな行動を起こさなくても構うまい。

「なら、今日は私に付き合ってもらおうかな」

そうやってきたのはエヴァ

「良いですよ、どうせ暇人ですしね」

『どうしたんだよ、エヴァ』

念話で聞いてみた

『なに、それに久しぶりの京都だ、観光もしたいのだよ』

観光って、夜中抜け出してまで行ってたじゃないか。

まあ良いさ、付き合ってやるか。

夕方、俺は宿に俺の分の分身を置いて関西呪術教会の総本山近くにある山の頂上で待機していた。

本来ならエヴァを連れてくるつもりだったのだが奴は思念体だし、魔力がほとんどない

できるとしたら念話ぐらい

魔法の射手すら使えない

「うん？ 待てよ、そーいやなんで昨日はあんなにエヴァが暴れられたんだ？」

謎だ

「つと、ようやくお出ましか」

スコープの向こう側に映るのは四人の男女

フェイトもそのうちの一人だ

ここで全員、殺すか？

いやだがそれはあまり面白くないな

「……様子見るか」

フェイトside

目の前には関西呪術協会の総本山に張ってある結界がある

「……………」

こんな結界、壊すのなんて簡単だけでも僕はそれを躊躇っている
もしもこれを破壊することによって『狙撃種』が襲ってきたら？

まず間違いなく一瞬で皆殺しだろう

どういうわけか彼には防御壁の類いが効かない

唯一、僕が知っている中で彼の弾丸を一度でも凌げるのは紅い翼の
ゼストのあの何重にも張られた最強防御のみ

僕には彼のような技は使えない

ゆえに防御方法は皆無

「どないしたんや新人、早よ結界を壊してえな」

煩いな、実はここが正念場なんだよ？

自然と手に力がこもる

なんなんだこの感情は？

焦り？ 恐怖？

馬鹿な、僕は所詮は人形

そのような感情があるはずがない。

だから腹をくくれなんて、自分に言い聞かせるな。

「――――いくよ」

その言葉とともに結界を破壊する

いとも簡単に壊れた結界

僕は壊した状態で数秒、ジッと動かずにいる。

「おお！？ 凄いやないかい、新人！！」

肩の力が抜けるのが解る

良かった、なにもしないようだね。

「じゃあ、僕は近衛木乃香を奪いに行ってくるよ」

ここで邪魔をする気が無いようならば彼の気が変わる前に急ごう。

そう、今思えばこれが焦りと恐怖という感情だったのかもしれない。

しかしこの時、僕にそう考える余裕はなかったのだった。

side
out

銃撃21（後書き）

さっさと修学旅行編を終わらせて、学園祭編に入りたいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7075q/>

その男、孤独の戦士なり

2011年10月8日20時58分発行